

昭和49年1月1日発行
 発行所
 名古屋市中区表門前町6/2
 井上重兵衛 電話(321)1480
 名古屋狂言共同社
 印刷所
 有限会社 安井印刷所 電話(481)7446

狂言人語

あけましておめでとうございます。すさまじいインフレ、物価高と品不足に明けた昭和四十九年は、文字通り試験の年となりそうです。憶測と不安とがいろいろ乱れる中で、生活防衛に追われ

生時代だけのものではなく、卒業後の社会へ、生活へとつなげて行かれる様大いに期待するものです。

*一月二十七日には「三人の会」で野村又三郎師の「釣狐」が上演されます。狂言は「猿に始って狐に終る」と云いますが「靱猿」の猿曳に引かれる子猿

謹賀新年 狂言 共同社

昭和四十九年元旦

がちな今日ですが、こんな時こそ能・狂言その他伝統文化の持つ真価があらためて問われることでしょう。私達一同も厳しい試験の年として受けとめ、精一杯がんばりたいと思います。

物価高 金なしものなし寝正月 めでたくもありめでたくもなし

*年頭から演能は盛んです。一月七日は名古屋学生能楽連盟主催による恒例の学生能、能五番狂言一番他という番組に学生達が日頃の修練を発表します。年々盛大、充実して行くこの会が、学

(狂太郎)

の役で初舞台を踏んだ狂言師が年来の修業の後、その集大成として演ずるのが秘曲「釣狐」です。又三郎師の円熟安定した舞台をご期待下さい。

*昭和四十九年度、当地で開催予定の狂言会をご紹介します。

- 二月十一日 大蔵流狂言名古屋会
- 四月七日 やるまい会
- 六月廿三日 和泉流狂言会
- 四月二十五日 名古屋狂言小劇場
- 七月十四日 朝日狂言会
- 八月下旬頃 名古屋狂言小劇場
- 十月十日 やるまい会
- 十一月十日 和泉会

一月の催能

| | | | |
|--------|-------|------------------|-----------------|
| 一月六日 | 若手能 | | |
| 一月七日 | 学生能 | | |
| 一月十五日 | 清韻会 | 能鶴 龜殿島修二 高安 滋郎 | 能巴 奥村久枝 西村 欽也 |
| 一月二十日 | 宝生定式能 | 能海 衣斐 本雅 西村 欽也 | 能小鍛治 野口録久 高安 滋郎 |
| 一月二十七日 | 三人の会 | 能景 清 和島富太郎 西村 欽也 | 能熊 野泉 嘉夫 高安 滋郎 |
| 一月二十七日 | 三人の会 | 能釣 狐 野村又三郎 井上礼之助 | |

狂言解説

呂蓮川諸口修業の僧、一夜の宿を頼んだところ、宿の亭主から弟子にくれと頼まれました。首尾よく髪を剃り上げ、伊呂波の手引をひきながらやると呂蓮坊という新弟子が出来上ったところへ、亭主の妻が現れ、何故に髪を剃った、元の様に毛をはやせと両者にせまります……

狂言巻空

野村 広二

を捧る、加賀の百姓と酒を捧る越前の百姓が道連れとなり、一緒に上頭へ年貢物をおさめます。歌の御会に上り合せたとあって上頭から様々な難題が出されますが、首尾よくこれに応え、お流れを丁戴した上、万雑公事も赦免され、二人は舞下りに故郷へ帰ります。

釣狐川眷属共をことく釣りとられ、今は一匹となった老狐、獵師の伯父である伯藏主に化け、殺生をいさめることとしました。狐の熱心の恐いことを玉藻の前の故事をひき、語って聞かせ、首尾よく思いとどまらせ、わなまでも捨てさせました。上気嫌で小歌まじりに帰る狐を立ち止まらせたのは、道に捨てられたわなの餌。わなと知りながら餌にひかれる畜生の悲しさは遂に正体を現わして餌を食わんと入りします。一方獵師もこれを察し、わなを仕かけて待ちかまえ……

新年おめでとうございます。四十九年の能界が多幸でありますようみなさまとともにまず祈りたいと思います。

四十八年も多事の年でした。能楽堂新設、老女物、狂言会、祝賀、追善、記念能、稀曲の上演、東西の本願寺能書籍など資料の発行、叙勲、受賞ほか数多い話題を提供します。長年狂言や

能に展望広い研究を持たれる古川久氏が紫綬褒章をお受けになって、心からお祝いを述べたい。また驚流狂言保持者河野晴臣氏の叙勲にも、芸術祭優秀賞が野村狂言の会別会・和泉会別会にこれもめでたい。能の同賞は東京豊春会(金剛流・望月)、大賞は能楽離子体系(ビクターレコード)に決定。四十七年度の大賞は豊嶋弥左エ門氏が受け、同流二年連続の榮譽は、二つの狂言会の受賞とともに明るい話題といえよう。狂言では、茂山千作氏の明るさと格調、野村万蔵氏の行住座臥のよさと三宅藤九郎氏の風格を昨年も味い得て感銘深かった三番叟と那須語(東京)

・狸腹鼓(狸・千五郎)の千作氏、川上の万蔵・藤九郎両氏と三長老は健在。今年もその活躍を期待しましょう。ほかに黒川能の伊勢と京都(金剛会)の上演も特記しよう。京都でみた狂言は膏葉煉。結びが現行二流とはちがって、一人が相手を膏葉の力でねじ伏せる仕方がおもしろかった。感想の要点は金剛会から求められておくれたので省くが黒川能の人たちの飾らぬしかも礼儀正しい進退には敬服、そしていつまでもあのやや異様な謡のふんい気が心をあやしくやさしく揺り動かして止まないこれらに引きかえ悲事は野々村戒三・山本博之氏ほか、他界されたことである。ご冥福をお祈りしたい。なおテレビ能(NHK)については各界のアンケートが能楽タイムズ(四八・十一月第一回)に連載されて興味深々。昨年

は狂言六番、能七番ほど放送(十一月まで)。十一月は高橋進氏の善知鳥(佳編)と小督(元正)であった。多数の回答の展開が待たれる。

さて、昨年の名古屋は漸進的なよさが大小の花をつけて明るい年であった学生能・婦人能・新能・義援金能など例年のように盛ん。そのうち、調友会の充実は何よりもうれしい。今年もきびしい稽古怠りなく、息切れせず、一層の上達発表を切望したい。能では張良(鎮之丞)蟻通(弥左エ門)のワキをつとめた西村欽也氏の好演を特筆しよう柴田初太郎氏の数番の仕舞の佳さもあげたい。狂言は朝日狂言会(第十五回)名古屋和泉会・やるまい会に名古屋狂言小劇場も活潑、大蔵流なごや会もにぎやか。二回上演の川上のほか、前述の狸腹鼓(笛・藤田六郎兵衛)月見座頭(山本末次郎)磁石・膏葉煉(千五郎)、闇罪人(万作・万之丞)は楽しい舞台であった。無布施経(又・万作)も、共同社が上演六十番前後、昨年も活躍したことは言うまでもない、未広(松・秀・弘)祐善(松・礼)栗焼(礼・卯)に花子(卯)の大曲など。今年の前進に希望をかけよう。年末の放送は、芸能百選田の芸能(田植・万作ほか)大地の舞・黒川能(芸能と農村近代化の統一)、ともにNHK)をみる。

よい、うまい、楽しい、おもしろい能や狂言が数多く舞台に実現するよう年頭から大きな期待をかけた。

二月の予告

| | | | | | |
|--------|-----|-------|---------|----------|--------|
| 二月十日 | 観世会 | 能 翁 | 観世 元正 | 千才 観世 | 三番叟 和泉 |
| | | 能 鶴 | 観世 元昭 | 面箱 井上松次郎 | 西村 欽也 |
| | | 能 舟弁慶 | 観世 喜之 | 高安 滋郎 | |
| | | 能 福之神 | 佐藤卯三郎 | 大野 弘之 | |
| 二月十七日 | 梅猶会 | 能 田 | 菊池 重郷 | 西村 欽也 | |
| | | 能 班 | 熊沢恵美子 | 高安 滋郎 | |
| | | 能 山 | 梅若 盛義 | 高安 滋郎 | |
| | | 能 因幡堂 | 井上礼之助 | 佐藤卯三郎 | |
| 二月二十四日 | 青陽会 | 能 花 | 前野 郁子 | 高安 勝久 | |
| | | 能 杜 | 若 紫田 収武 | 西村 欽也 | |
| | | 能 天 | 鼓 上田 照也 | 西村 欽也 | |
| | | 能 磁石 | 佐藤 友彦 | 井上礼之助 | |
| | | | 大野 弘之 | | |

能楽教会名古屋支部よりおしらせ
 旧冬十二月二日催しまし歳末助け合い義捐
 能は残額を左記の通りそれぞれ県、市へ寄
 託致しました。
 各位の絶大なる御協力を感謝致します。
 愛知県 拾六萬四千参百円
 名古屋市 拾六萬四千参百円
 ○観世流太鼓方、野崎太郎氏 一月十二日
 心不全にて逝去謹しんで御冥福を祈る

賀正

ふごや

河文

電話代表(3)一三八一番

トヨダビル店

大名古屋ビル店

とやな

船津屋

電話券名代表(2)八一八〇番



昭和49年2月1日発行
 発行所
 名古屋市中区東門前町6ノ2
 井上重兵衛方 電(321)1480
 名古屋狂言共同社
 印刷所
 有限会社 安井印刷所 電(481)7445

狂言人語

まだ／＼寒さが続きます。毎年とは申しながら太平洋側のカラ／＼続き、日本海側のどか雨はいずれも記録破りとのこと。石油危機、物不足に加えて暖房制限、給水制限、電力制限と打続いた状態も、少しずつ緩和されつつある様です。それでも先の不安が解消した訳でもなく、昨年出版された本のベストセラーは「日本沈没」をトップに「日本列島改造論」「にんにく健康法」と続くのがよく世相を反映するものと云えましょう。これに加うるに「ノストラダムスの大予言」、まだ／＼こういう状況が続くのでしょうか。

さて、今月の話題は十日観世会定式能初日に観世宗家の「翁」が上演されます。三番叟に和泉流宗家保之師、当地では久し振りの上演です。十一日はこれも恒例、すでに四回目を迎える大蔵流狂言名古屋会。年々盛會に開催されますが、日頃の会員諸氏の修練の成果を是非ともごらん下さい。

二月の催能
 二月十日 観世会

狂言解説

三番叟のいわゆる狂言ではないが、能「翁」で、千歳、翁の舞に続いて狂言方が舞うのがこの三番叟である。直

| | | | |
|--------|---------|----------|-------|
| 能 翁 | 観世 元正 | 千三才 | 観世 清和 |
| 能 鶴 | 亀 観世 元昭 | 面箱 井上松次郎 | 和泉 保之 |
| 能 舟弁慶 | 観世 喜之 | 高安 滋郎 | |
| 能 福之神 | 佐藤卯三郎 | 大野 弘之 | |
| 二月十一日 | 大蔵狂言会 | | |
| 二月十七日 | 梅 猶 会 | | |
| 能 田 | 村 菊池 重郷 | 西村 欽也 | |
| 能 班 | 熊沢恵美子 | 高安 滋郎 | |
| 能 山 | 姥 梅若 盛義 | 高安 滋郎 | |
| 能 因幡堂 | 井上礼之助 | 佐藤卯三郎 | |
| 二月二十四日 | 青 陽 会 | | |
| 能 花 | 月 前野 郁子 | 高安 勝久 | |
| 能 杜 | 若 柴田 収武 | 西村 欽也 | |
| 能 天 | 鼓 上田 照也 | 西村 欽也 | |
| 能 磁 | 石 佐藤 友彦 | 井上松次郎 | |
| | 大野 弘之 | | |

面で勇壮に舞うもみの段と、一転して壮重な鈴の段を目度く舞い納めます。福之神の年の暮に大社へ例年の通り参詣に出かけた二人連れの前に、姿を現わした福の神、ちゃっかり神酒を請求したりもしますが、二人にありがたい教示を与え、笑いの内に去ります。

因幡堂にあまりの大酒呑みの女房に愛想をつかした男、妻を離縁して因幡堂に新しい申妻に出かけました。それを知った妻は一計を案じ、自分がまんとお告げの妻となつて男を待ちうけます。

磁石に都に奉公に上ろうとした田舎者大津松本の市で人買にだまされ、売とばされそうになりました。抜け目ない田舎者は鳥目をも失敬して逃げますが人買いに追つかれ、振り上げられた刀を前にして、田舎者はとっさに「呑まう」とやり返します。

随想

在所ノ者

三番叟の披露については大変な苦勞を重ねた思い出がある。「保能会で観世流平野清氏の翁がある。三番叟はお前に決つた、稽古は俺がつける。お笛は金森準三氏だ、よく頼んでおけ。一応角洲先生に挨拶に行つてよくお願ひして来ておけ」と井上菊次郎師に申渡されて、其頃武平町に住んでみえた角洲先生に挨拶に行つた。既に現役を引退された老先生は「体の調子がよければ見に行つてやる。しっかり拍子をふむんだよ」と励まして下さつた。それから毎日、現松次郎氏と二人拍子の稽古、掛声のけいこ、笛は拍子が覚え

られるまでは必要ない「イヤーアンハア」。「ヤアンハ」の掛声に合はせて右、左の膝で拍子のけいこ「声が低いそれでは鼓の掛声で消されてしまふ。自分のものにするんだ」と八月の初めから九月一杯迄毎日通う時も、ヤアンハで膝をたたく、足で拍子をとるもう大丈夫と立ち稽古になる。

掛素袍を帯にはさんで、もみの段、拍子盤の音に合はせて、掛り拍子から汗は流れる、声はかすれる。「違ふ、一度」「又違ふ、そんな事教えてない自分で造るな」しっかりとふむんだ。もつと袖を巻いたら手を上げる。余しやなく飛ぶ先生の声にオロ／＼しながら段々よどみなく舞える様になって来る先生の唱歌に合はせて、鈴の段に入ると、さらに激しくなる。「ソレ順の拍子」「そこは半だ」、「面返り」はもつとキビ／＼するのだ。「ユリ合せ」は「鈴が違ふ、鈴は鼓と合ふのだ。それでは半拍子違つて鈴が半に入る」しっかりしろ、それでもユリ合せか、何故もつとピタリと決められんのか。散々どなられ「この腰は何ん役」とどづかれて、あゝどうしてこんな役をつづられたのか、これはとてもたまらんと腹の中でプリ／＼していると「お前何を考えてる、やる気がないならやめろ」と高飛車にどなられ、じぶしぶ稽古を重ねて初めて金森先生の笛を聞かせてもらう日が来る。先づ最初に一度通して吹いて聞かせてやる。先生の唱歌が笛で吹くところなる。

先生はゆっくりと一順吹いて「どうだった聞きとれたか、しかし本番となると鼓と大鼓の掛声で聞きとりにくいから笛だけは段の所を頭に入れて、掛りの前と手をきくのがさぬようにするんだよ」と親切に注意された。

舞つてみる。笛に気をとられて手を忘れたり、拍子を外したり、それでもやっと精一杯の勉強の成果は、曲りなりの物になってやっと、呑みこめた手の上り、鳥飛ユリ合せに、矢張りうれしかった。

狂言万声

野村 広二

一月二十七日三人の会をみる。正月から熱田・能楽殿はにぎやかである。今年には二十日の宝生会で餅酒(卯・礼・友)にでかけたのが狂言のみ始め。正月に餅酒のような曲をみるのは昔のことが思い出されてゆかしい。出来も明るくさりとっていてよい。三宅藤九郎氏より寅年の小舞謡をいただく。「山獣の君と祝われる、竹を好んで住む虎は、心清きがゆえにこそ、くもらぬ法の道深く、羅漢につかえ奉れば、猫より優し優しけれ」元日から三日間テレビやラジオで狂言や能を追うことは例年の通りでした。元日は竹生島(英雄、NHK、以下おなじ)二日は夷毘沙門(千作・千五郎)・若菜(万蔵・万作ほか)をみる。ラジオの方は元日の五流謡曲の翁が宝生流、二日は独吟・一調に狂言小謡・貝尽し(弥太郎)。元日は武能的なよさに襟を正し、二日は長老達の大きく深く雄勁繊細な味にたんなる。喜之氏の遊行柳をきいていてあの都下の空下りにも似た感じにおそわれる。何とも不思議であった。狂言は三日靱猿(保之・藤九郎)筑紫興(忠一郎・幸四郎)をきく。年末からの風邪が少しよくなると、正月のこととして、つい手が盃の方にのびる。二日には三・四の本を開く。沼州

雨氏が観世・一月号に書かれた「今月の能から・関西」の述懐と警世の序のことばをかみしめながら、まず万蔵氏の「三番叟」(狂言の道)。次は「わらんべ草」(大蔵虎明)より「若き時は、何の心もなく、ただ面白とばかり思ひしが、年よるにしたがひて、我道のたよりにもならんと、万事に心がけし也」のところを声を上げて読む(巻五・八十九段、岩波文庫)。それから二・三の本を手にしたあと、宝生流・高橋進氏の俳句で結ぶ。同氏句集から「霞来と手をかざしたる女かな」「平凡に平凡に去年今年かな」「遅れ来し一人二人や初謡」など正月の句を目にする。二十五日、日展、(愛知県美術館)に行き、「黒川能・熊野」(森田茂)の絵ハガキを求める。金剛さんからおくられた金剛(八八号、黒川能特集)に北岸佑吉氏が「上座の道成寺でも乱拍子の足にはどこか金剛流の感じもあるように思ったことを、今度の鐘巻を見ても感じた云々」と書いておられるが、昨年十一月十五日同席で拝見の私も同感であった。さて、三人の会の能は景清(和島富太郎)と熊野(泉嘉夫)。熊野が車からおりるところまでみたがどちらもよかった。軍中の熊野を伴にすむ宗盛(高安滋郎)がユウケン扇の型をした。珍しくまた効果があった。狂言は釣狐(野村又三郎・礼之助)。やはらかいなかにあやしさと強さをこめて、わかりやすい、釣狐を演じた。橋掛を十分用い、人間の心の弱さを微妙な動きであらわしておもしろかった。長世・大槻秀夫・静夫三氏三態の舞も出色。

放送は「市民大学講座・日本の歌謡・関吟集を中心に」(狂言小歌・京重・茂山千作)をみ、放下僧(桜間金太

郎)「思いでの名人集・喜太六平太」(後藤得三・長尾一雄)をきく。本は「狂言総覧」(安藤常次郎・古川久・三宅藤九郎・小林實、能楽書林)ほか。おわりに、四月から朝日文化センター(名古屋)で狂言講座(和泉流)が開講されることをお伝えしたい。

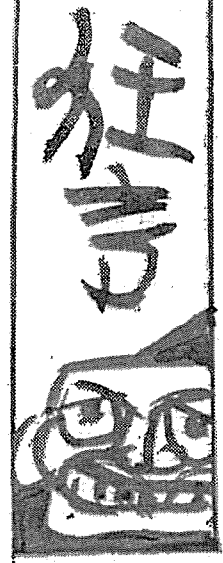
三月の予告

- 三月三日 九卓会
 - 班 女 野垣 慶子 高安 滋郎
 - 井上松次郎
 - 井上礼之助
- 三月十日 観照会
 - 清 経 宗久 西村 欽也
 - 森 幸子
 - 菊下 応子 高安 滋子
 - 竹下 稲子
 - 佐藤 秀雄
- 半能融
 - 鷹羽 早苗 高安 滋郎
- 狂 太刀奪 野村又三郎 井上松次郎 井上礼之助
- 三月廿一日 竜吟会
 - 安達原 大脇寿美子 高安 滋郎
 - 野村又三郎
- 三月廿四日 久田復正会
 - 三月三十日 三菱連合会
 - 三月三十一日 於 文化講堂中日五流能
 - 能 清 経 金剛 巖 高安 滋郎
 - 能 陽貴妃 観世 元正 江崎金治郎
 - 能 鞍馬天狗 野村万之丞
 - 能 井上松次郎 佐藤 秀雄
- 二部
 - 能 安 宅 観世 元昭 江崎金治郎
 - 能 井 筒 善竹 忠重 善竹忠一郎
 - 能 藤 戸 宝生英雄 久保田千三郎
 - 能 藤 戸 金春 信高 高安 滋郎
 - 能 野村又三郎
 - 能 金藤左衛門 善竹忠一郎 安東伸元

酒 味 嚙 商
 た ま り 食 料 品

む と う 食 品 店

名古屋市昭和区川名本町1の10
 電話 2166番



昭和49年3月1日発行
発行所
名古屋市中区奥門前町6/2
井上重兵衛方 電(321) 1430
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社 安井印刷所 電(481) 7445

狂言人語

此頃狂言の稽古を始めた五才になる子供の名を呼んだら「ハア〜」と返事が返って来た。用を云い付けたら「カシコマツテゴザル」とすましていてだけであつてもやらない。「早うやれいやい」と怒鳴る破目となつた。

ブロック遊びに熱中しながら小謡を口誦さんだりする。稽古も遊びのうちなのである。敵しさを植えつけるのはまだ〜の事に思われる。

四月からいよ〜栄のスカイルにて「朝日狂言教室」が開講、実技指導の場として和泉保之、井上松次郎師らが指導に当る。受講希望者は左記へお問合せ下さい。

名古屋市中区栄三十四一五

栄スカイル十階

朝日文化センター栄教室

TEL(二六)三八六六

三月の催能

三月三日 九草会

班 女 野垣 慶子 高安 滋郎

井上松次郎 井上礼之助

三月十日 観 陽 会

能 清 経 沖 宗久 西村 欽也

能 祐 菊地 応子 高安 滋郎

半能融 佐藤 秀雄

狂 太刀奪 野村又三郎 井上松次郎

三月廿一日 竜 吟 会

能 安達原 大脇寿美子 高安 滋郎

三月三十日 三菱連合会

能 清 経 金剛 巖 高安 滋郎

能 陽貴妃 観世 元正 江崎金治郎

能 鞍馬天狗 友枝喜久夫 福王茂十郎

狂 井 杭 野村万之丞 野村又三郎

二部

能 安 宅 観世 元昭 江崎金治郎

能 井 筒 善竹 忠重 善竹忠一郎

能 藤 戸 宝生英雄 久保田千三郎

能 藤 戸 金春 信高 高安 滋郎

狂 金藤左衛門 善竹忠一郎 安東伸元

狂言解説

太刀奪太刀をも持たずに外出した主従、そこへ見事な太刀を持った奉公

人が通りかゝるのを見つけた太郎冠者は太刀を奪い取ると出かけて行き、あべこべに主の大事の小刀まで奪われてしまいます。大事の刀を取り返さんと主従は奉公人を持ち伏せ……

井杭井杭と呼ばれる男、主人の所へ行く度に一言毎に頭を叩かれるため清水の観世音に願をかけ、隠頭布をさづけられた。主人が頭を叩こうとする

と頭布をかぶって井杭は姿を消してしまふ。丁度参り合せた算置きに早速井杭の所在を占わせるのだが……

狂言万声

野村 広 二

一月、二月も早や過ぎ、三月を迎える。硝子戸越しの雲はおだやか、日も長くなつたが、頭上の月はまだ冷めた。演能は各地ともにぎやか。二月十日観世会。翁付きの能組に敵爾さを味わう。おごそかな翁(元正)、すがすがしい千才(清和)に、柔和な三番叟(保之)、面箱の役は松次郎。立錐の余地もない見所の眼は終始舞台にそがれる。三番叟が退場して舞台の役者が居ずまいを直すと脇能・鶴亀(元昭)がはじまる。狂言口開(くちあけ)・序奏のハヤシ。「それ青陽の春になれ

ば」で、舞台は明るくかわる。莊重華麗。そして脇狂言・福の神(卯・友・弘)。喜びに溢れる。鶴亀がすんで狂言になると見所は半数にへつたが、約二時間、式能の序にして大切な部分をみて楽しかった。それから舟弁慶(喜之)。哀婉豪壯、佳篇であつた。つづく十七日梅猶会の山姥(盛義)は絢爛力強きに充ちていた。狂言は福の神のほかに因幡堂(礼・卯)・磁石(友・弘・礼)をみたが、好演の班女(梅猶会・龍沢恵美子)のアイ(野上の宿の長)に父松次郎氏(所の者)とともに登場した在京の井上祐一氏は持味の柔らかかさに役柄の強さを巧みにだしてよかつた。これはむしろその持味に強さが加わつたといふべきであらう。よろこばしい。これをさかのぼる十一日は大蔵狂言会・なごや会。今年も盛会。小舞も狂言も真剣で楽しい舞台が快い。棹尾を飾る小舞三番、福部の神(善竹十郎)海道下り(圭五郎)・塗師(弥太郎)をみてから、楽屋で大蔵氏とまた来年の催しに期待しますとあいさつして別れる。この日武智鉄二氏の狂言をみる。あの温顔は昔と少しも変らない。私より一足先に還暦を迎えられ、東京・京都で記念の狂言を舞つた武智氏は名古屋では鱧包丁を演ずる。迫力ある武智芸に次第に引きこまれていく。故弥五郎翁をしのぶところもあつてなつかしくいいた。「東は東」(御園座)、名大の集中講義・狂言に來名以來久々にお目にかかつた。十幾年振りであらう。わずかな時間を得て、金剛様ご母堂他界のこと、奈良の諸行事の思い出、名古屋の狂言の催しなど話し合つた。その晩大阪に向い、四国まで行きますとの武智氏のことばに、随分忙しいのだと健康を祈つた

さて二十一日は京都茂山狂言会の茶子味梅(ちやさんばい、保之・又)に松次郎氏(しょうじ)が加わる。にぎやかであった由。催しは備前焼の展示(丸善)で「白塩に窯を清めて切火すれげ炎もわれも私ならず見ゆ」(各見政峯)の茶掛をみる。狂言も能もこの境地だとおもった。春の兆しが少し動く午後のおもってきたであった。

放送は熊野(豊嶋弥左エ門、ワキ・高安滋郎)狸々(桜間道雄、人間国宝鑑賞)雲林院(後藤得三、同)見物左エ門(野村万蔵、同、いづれもNHK)をみる。本は私の能楽自習帖(三上慶子、河出書房新社)日本芸能史論考(松田修、転換期の狂言師・大蔵虎明・わらんべ草、法大出版局)書評・米倉利昭・わらんべ草研究(他田広司、芸能史研究四三号)紹介・狂言総覧と狂言集(朝日読書の頁、リーダー欄、二・二五)万蔵の未広(現代演劇協会、三百人劇場開会式、演劇映画欄、芸術新潮三月号)など。

随想

在所ノ者

三番叟のこと(その二)

「当日は朝早いのだ。その上、昔なら別火精進けっさい、体の調子は最上であらねばならぬ。前日は早く寝て充分休むこと、朝はよくお参りして心を清めて出て来ること、一時間前には装束をつけて鏡の間で神盃があるからそのつもりで」

先生に注意されて、緊張し切った気持ちで其の日を待つ、若さと期待と不安は、前日も充分には寝られるものではない。翁との掛りあいには、面箱との応

答に不安がのこる。二月の身を切るような冷い早朝、呉服町の能舞台へ出かける。冷い朝、はく息は白く手はかじかんで、足先はやめるようだ。けれど大役を果さねばならぬ緊張感、全身に力をつけ、寒さなど消しとばす程だ。

楽屋で挨拶をすませて、装束をつけて前に朝がゆをよばれる、体中温かくホカ／＼して来る。平野さんが別火でたいたから安心して食べて下さい、と云って来られる。

愈々朝日の指しこむ鏡の間、面箱の飾りの前で翁千歳三番叟面箱離子方地謡後見と順に御神酒と御洗米塩とお祓をすませて、お調べである。「井上家の三番叟だ。モミは精一杯元気に鈴の段は出来るだけ位を失はぬように、ユリ合せはピタリと決めろ、これだけは忘れるな、他に云う事はなし」と菊次郎先生の緊張した声に思はず心が引締って「ハイ」と聲が上る、面箱を先頭に未だ薄暗い感じの橋掛りへ

全曲終って面箱へ黒式を納めて、ツユを拂って幕へ向う。幕へ入って幕がおりたとたんホッとした感じ。思はずゆるむ緊張と同時に「しまったナあそこはもっとしつかり拍子をふむのだった」「あそこは一寸外れたんぢやないか」と心の中は心配斗り、楽屋へ入ると、「お目出度う」「よかったぞ」と励ましの言葉、菊次郎先生の前へ出る。「大体はよかったが翁と向合った時、お前の方が早く後向いたナ、あれは翁が向きを変える時一諸に変えなきゃいかん。鳥飛はもっと高く飛べ。面返りが未だピタリと決まらなかつたぞユリ合せは一寸、力が足りないようだったぞ」と注意をうけて、先づどうや

ら大過なく済んだと思ったとたんホッと安心感が湧いて出る。金森さんが「よかったぞ、これでは数をかけて練習し、舞台をふむと自分のものになる、せい／＼何回でもやってみて自分の三番叟にするんだね」と家へ帰った角洲先生の激励の手紙と不参の挨拶が来ていた。有難いと思った。

四月の予告

四月 七日 やるまい会 午後一時

鼻取相撲 茂山忠三郎 山本 則直

水 汲 野村 万蔵 野村万之介

瓜 盗人 茂山千之丞 山本東次郎

寝音曲 野村又三郎 井上松次郎

称宜山伏 山本東次郎 茂山千之丞

四月十四日 観世会 山本 則直

能 千 手 梅若万三郎 高安 滋郎

能 鶴 橋岡 久共 西村 欽也

狂 禁 野 井上松次郎 井上礼之助

四月廿一日 猶風会 高安 滋郎

能 熊 野 杉田 合子 高安 滋郎

四月廿五日 大声会 大野 弘之

未 広 井上松次郎 佐藤 秀雄

小 謡 水 汲 佐藤 秀雄

小 謡 鳴 子 野村又三郎

千 鳥 佐藤 友彦 井上礼之助

四月廿八日 清韻会 鷺見 政行

能 八 島 泉 嘉夫 西村 欽也

能 半 潮 野村又三郎 高安 滋郎

能 望 月 大槻 秀夫 高安 滋郎

能 不 腹 立 茂山千五郎 高安 滋郎

能 井 上 松 次 郎 井上礼之助

四月廿九日 幸友会 離子会 佐藤 秀雄

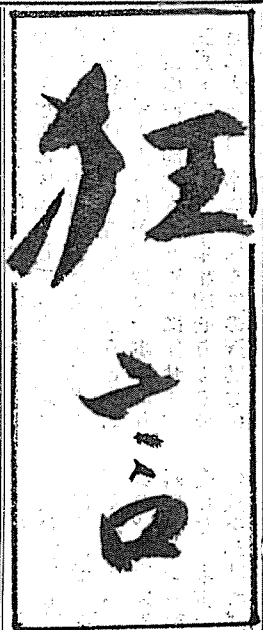
新築開店

(松中交叉点角 軍艦旗を目当にお出下さい)

割烹 清 楽

TEL 763--2211 昭和区隼人町1-1

二階 食堂
 三階 お座敷50人位迄 宴会お引受致します
 仕出し、宴会、出前、迅速応相談
 能楽関係者特に勉強します



昭和40年4月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5/2
井上重兵衛方 宛(321)1430
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社 安井印刷所 宛(481)7445

狂言人語

各地の桜便りが待ち遠しい四月、待望の「朝日狂言教室」も開講の運びとなり、いよいよ「狂言界の活動も活発化して参りました。

四月七日は「第十五回やるまい会」野村又三郎師得意の「寝音曲」に人間国宝野村万蔵、万之介親子による「水汲」、大蔵流からは忠三郎、千之丞両師に山本三兄弟が加わり、別掲番組の通り会を盛りたてています。

四月二十五日は、すでに第七回を数える「名古屋狂言小劇場」が「狂言は音楽だ」として「末広がり」「千鳥」の二番に狂言小謡「水汲」「鳴子」を加えて上演されます。

この他、五月には二十六日「也留舞会社中発表会」、そして六月二十三日には「河村丘造師八十才祝賀記念」と和泉流狂言大会」が計画され、河村丘造師の指導を受けた新城市狂言同好会を初め、玉石会、名古屋大生会、狂言共同社、の共催、和泉保之師の後援で開催される予定です。諸氏の日頃の修練の成果発表の場としても、大いにご期待下さい。

四月の催能

四月七日 やるまい会 午後一時

鼻取相撲 茂山忠三郎 山本 則俊

水汲 野村 万蔵 野村万之介

瓜盗人 茂山千之丞 山本東次郎

寝音曲 野村又三郎 井上松次郎

柳宜山伏 山本東次郎 茂山千之丞

四月十四日 観世会 山本 則俊

千手 梅若万三郎 高安 滋郎

能鶴 橋岡久共 西村 欽也

狂禁野 井上松次郎 井上礼之助

四月廿一日 猶会 熊野 杉田 合子 高安 滋郎

四月廿五日 大声会 未 広 井上松次郎 大野 弘之

小謡水 一汲 佐藤卯三郎 佐藤 秀雄

小謡鳴子 野村又三郎 井上松次郎 井上礼之助

千鳥 佐藤 友彦 鷺見 政行

四月廿八日 清瀬会 能八 島 泉 嘉夫 西村 欽也

能半 野村又三郎 大槻 秀夫 高安 滋郎

能望 茂山千之丞 大槻 文蔵 高安 滋郎

同 月 茂山千之丞 井上松次郎 井上礼之助

狂不腹立 井上松次郎 佐藤 秀雄

四月廿九日 幸友会 囃子会

狂言解説

禁野||禁野へ狩にかけた大名、途中で通行人を無理矢理連れにしたが、ふとした事から逆に弓矢で威され、小刀、小袖、上下まで奪い取られてしまふ。裸にされた大名が思い出したのはこの禁野についての昔物語……。

腹不立||新築した堂の堂守がいなため、施主の二人が上下の街道へ出家を捜しに出かけた所へ通りかゝった出家、早速堂守に請われて行くが、名前を尋ねられて「腹不立の正直坊」と名告った事から、二人の施主は腹を立てさせようとからかい始める……。

狂言万声

野村 広二

四月七日やるまい会。雨模様の日であつたが能楽堂の桜は満開。その十五回公演を祝するようであつた。さて、三月二十三日「ふるさとの文学・愛知篇」(文京書房)の出版記念会で来名の谷川徹三先生にお会いする。「愛知の陶芸」について話されたが、話の半ばにでた「冷え枯れた姿」のことは感銘が深かった。私が大学の卒論でお世話になつた作品(W・ペイター)の名前もでて、一瞬春秋に富み多感な青年時代の事が目の前にはっきり浮んでなつかしかつた。講演の出を待っておられる藤枝静男氏と三人のときは、ギリシヤ悲劇・志賀直哉の文学、殊に能の話がはげんだ。野口兼資・宝生新阿氏のおくれた芸の思い出話がうれしかつた。ワキの役が大層大切であるが先生は力説された。日本の技芸は上達すればするほど無心・宗教的境地に近づく

東洋人は「老」の思想を尊重するなど先生の発言が私の根本的據り所であることなど申し上げた。藤枝氏もかつてたびたび観能の機会を持たれた由。杉浦明平氏と三人のときは、イタリヤ文学、イタリヤ・ルネッサンス、自然の楽しさ・美しさを話し合う。丁度菜の花が食膳を豊かにする季節であつた。三十一日は中日五流能。第一部初番の「清経・披講之出端」(金剛巖)にまず感激する。第二部の「井筒・物着」(宝生英雄)はM教授と一緒にみる。すばらしかつた。狂言は「井杭」(万之丞・又三郎・良介)と「金藤左五門」(忠一郎ほか)。おもしろし。共同社は、「鞍馬天狗・白頭」(友技喜久夫)の間狂言(松・秀)を力演。四月に入つて二日は狂言教室(第一回、朝日文化センター)。松次郎氏の縛りの本読みと狂言の話ではじまる。六日久々上京。金剛流・奥野達也氏の「娵捨」と金剛巖・永護両氏の「石橋・和合」をみる。水道橋能楽堂。ここでは五日に野村狂言会、七日に金春安明君が祖父八条追善能で道成寺を舞つた。六日の狂言は「宗論」(山本三兄弟)。奥野氏の喜寿の祝いの娵捨で、金春八条の古拙のよさを見つけた舞台は充実した二時間十五分であつた。無心の境地とはあれをいうのであろう。このあとの石橋の無言の力強さと美しさは私の心を広々とし、紅白の牡丹の花にさそいこむようであつた。小山弘志氏に二・三の事を告げる。M教授からいただいた宿題、世阿弥は、どこから「花」のこぼれをもつてきたか。当時諸芸能に広く使われていたのか、世阿弥自身の考案か。それと私年来の課題無心と有心のことばの文学・芸能(能)や宗教の善悪両様の使い方の展望が得

たい、無主風に対し無心の位の「無」のちがいはどうでしょうか、無の字だけと切りあげるのはいけないのでしょうか、かまで申し上げ切れない短かい時間であつたが、無遠慮を顧みずお話しした。ところで七日のやるまい会に催主又三郎氏は「寝音曲」を演ずる。おおよくな主(松)に小賢しい太郎冠者(又)がうまくかみあい、明るい舞台をみせる。鼻取相撲(忠三郎・千之丞・則直)瓜盗人(千・則)・弥宣山伏(忠・則)・千・又)それぞれにおかし。水汲をしみじみと演じた万蔵氏は楽屋でこの秋は暮寿を迎えた祝いをすることになつたのでなかなか忙しいとつつましくまた楽しそうに語り、能・狂言の装束展を開く徳川美術館へ松次郎氏案内で急がれた。

随想

猿に始まり狐に終ると云はれる釣狐「共同社結成七十周年に釣狐を出そう君やれ」と歌村さんにお願ひして、稽古に入つたのは、三十三年暮だったかと思ひ、釣手は河村さんにお願ひして、稽古に入つたのは、十二月だった。先づ最初に計画をたて、メリハリ第一。狐の語りの練習は毎朝やろう。型に入つたら毎日型の研究をして、狐が化けた人間でありながら狐の天性が時々現れるむつかしさの表現と門水さんの言はれたその六ヶ敷さに体当りしてみよう。語りの中でもカンの外れるけもの声はどこが一番適切か。研究してみよう。張切つて練習に入つたが、仲々仕事もあり平常の役の消化もあり思うに任せず、正月もすませてやると本格的せりふの練習に入つた。幸に河村先生の適切な指

導と昔の人々の話題を参考に練習をすゝめ、そこはこう語るべきだ、そこはもっと調子を外して、そのせりふは早く。そこは区切りだから、調子を落して、低く出るべきだと指示をうけて語つてみる。

毎日一回宛練習する筈が、仕事に追はれ時には二日位休むと、矢張りかんじんの所で拍子が狂つて来る。三月初めに、白蔵主の型、けもの足、体をしめつける様な体型での飛上り面切り、杖のあつかい等をポツ／＼練習しかける。ゆりはりのけいこと、型のけいこにあけられてる内、決算期を終えて書類の作成等でも又忙しく、四月、五月は充分のけいこも出来ず仕舞、六月末から又これではいかんと毎日稽古を開始、型がきまってきた迄、語りの型だけでも完成しておきたいと毎日語つてみる。

かんの外れる所、言葉のはつきり出ぬ所を研究して大体これならと云う線を打出した。しかし中入前の小歌節のつらい事、これがかんじんの所、楽にはうたえぬとしても何とかものにするには矢張り毎日練習にたよる他なし。数をかける以外にはないと悟つた時、よし声が出ない、息の切れる状態にならぬようにするには体をきたえて慣れる事だと毎朝前シテ受けをやるうと心掛けた、大体三、四十分かゝる大変な事だった。しかし七十周年の出し物の一番である。負けられない恥しい狐は出したくないと必死だった。後の狐にも苦心した、成るべくカンマに体の動きを考えて、狐の習性を調べたが中々ハツキリつかむ所まではゆかぬ。只出来る丈のび／＼と軽く、餌にシヤれる態を狐らしく心掛けて研究した。本番をすまして、矢張り練習の教をかければ自信ももてるし、体の

動きもスツキリしてそれ程息も切れず出来るとその時は悟つたのだが……

五月の予告

| | | |
|-------|-----|------|
| 五月三日 | 観世流 | 流友大会 |
| 五月五日 | 巽 | 会 |
| 五月六日 | 壺 | 泉会 |
| 五月十二日 | 邦 | 翻会 |
| 五月十八日 | 九 | 卓会 |
| 五月十九日 | 鳳 | 鳴会 |
| 五月廿六日 | や | るまい会 |

| | | | |
|----------|-------|-------|-------|
| 能 小袖曾我 | 平井ミヨ | 岡田佐和子 | 西村 欽也 |
| 能 巴 | 玉井 弘子 | 井上礼之助 | 高安 滋郎 |
| 能 弱法師 | 高田 真六 | 井上松次郎 | 大野 弘之 |
| 五月 六日 流 | 佐藤 友彦 | 梅田 邦久 | 高安 滋郎 |
| 五月 十二日 邦 | 翻会 | 井上礼之助 | 西村 欽也 |
| 五月 十八日 九 | 卓会 | 片山博太郎 | 大野 弘之 |
| 五月 十九日 鳳 | 鳴会 | 井上松次郎 | 西村 欽也 |
| 五月 廿六日 | やるまい会 | 佐藤 友彦 | 高安 滋郎 |
| 五月 廿六日 | やるまい会 | 井上松次郎 | 西村 欽也 |
| 五月 廿六日 | やるまい会 | 井上松次郎 | 西村 欽也 |

金剛流長老山田仁三郎師四月十八日
心不全のため逝去 行年八十八才
謹しんで哀悼の意を表します。

皮膚科 泌尿器科

大野皮膚科医院

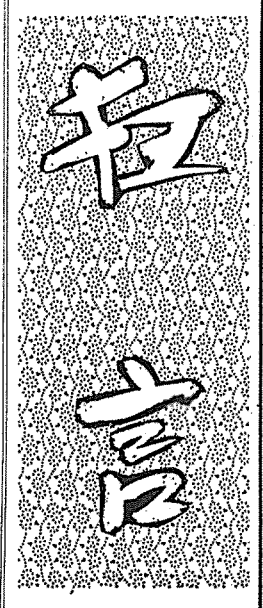
医学博士 大野 弘 之 (狂言共同社同人)

診療時間 午前 10時 ~ 午後 1時
午後 3時 ~ 午後 6時

名古屋市中区香春町 6-56
ダイヤモンドシティー4階
名西医療センター

水曜、祭日、土日曜午後、休診

電話 (052) 531-5553



昭和40年5月1日発行
 発行所
 名古屋市中区橋一丁目7-5
 井上重兵衛方 電(321) 1480
 名古屋狂言共同社
 印刷所
 日東印刷工業株式会社 電(481)7445

狂言人語

名古屋狂言界の長老、河村丘造師が本年六月二十三日をもって目出たく八十才を迎えられます。近年は健康上の都合から久しく舞台を遠去かって居られ、師のおだやかにして格調高い芸が見られないのがさびしいのですが、今もお元気で後進の指導助言、会の企画運営等に力を注ぎ、文字通り重鎮として重きをなして居られます。

此度師の八十才を心から祝賀して師の薫陶を受けた新城市狂言同好会の諸氏を中心に、狂言共同社、玉石会、名古屋大声会の共催で記念の狂言会を六月二十三日(日)に開催することになりました。どうかご声援下さいますようお願い致します。

五月の催能

- 五月三日 観世流 流友大会
- 五月五日 巽 会
- 能 小袖曾我 平井ミヨ
- 能 岡田佐和子
- 能 巴 玉井 弘子 西村 欽也
- 能 井上礼之助
- 能 弱法師 高田 真六 高安 滋郎
- 井上松次郎

狂 鷲 流 佐藤 友彦 大野 弘之

五月六日 壺 泉 会

五月十二日 邦 謡 会

能 藤 戸 梅田 邦久 高安 滋郎

能 山 姥 片山博太郎 西村 欽也

能 舟 ふな 井上松次郎

五月十八日 九 草 会

能 小袖曾我 観世 喜雄

能 杜 若 塚本 秀雄 西村 欽也

能 金 輪 有賀 滋子 高安 滋郎

狂 瘦 松 井上礼之助 佐藤 友彦

五月十九日 鳳 鳴 会

能 清 経 山崎 照美 西村 欽也

能 熊 坂 山本 一 高安 滋郎

狂 いろいろは 今枝 郁雄 今枝 靖雄

五月廿六日 やるまい会

随 想

在所の者

今は昔。名古屋の若宮まつりは五月十三日曳き初め、十四日真築、十五日本祭り、三日間黒船車を曳き、本祭り

は若宮神社から片端の東照宮迄一日掛り練ったものである。黒船車は門水先生の「名古屋祭り」に委しく解説がのって居る通り、黒漆の船体に水色の屋根、緋色ノラシヤに八幡丸と金糸でしたのぼりと吹流し横幕は山本梅逸下絵の金糸縫の波、すばらしいものでした。

へさきに一間四方の舞台があり、子供に仕舞「狸々」「竜神」「知盛」を舞はせ道行囃子は下り葉、神楽、しやぎり、如何にもおだやかな祇園祭り風のものでした。囃子は笛、鼓、太鼓、大太鼓で夜の帰りは、鉦入りにて三番叟、船全体に提灯をとりし囃子乍ら曳き出す情景は何とものどかな時代でした。

私がこの道へ入ったのは矢張り此町内に住み毎年仕舞を舞はされた事が大きな原因だと思えます。大太鼓は伊勢門水、謡は井上菊次郎、新三郎、着付は西脇豊三郎とそうたる顔ぶれ、囃子方は町内の若旦那、連中、いかにもおほらかな情態で、子供達も二階の船べりにもたれて揖方の掛声や、見物の人々を見ながら、喜んでいたものです。

おい「狸々」と呼ばれると順番を待っていた子供は、揃いの浴衣の上へ着付の胸当、大口に唐織を畳折、赤頭をつけ舞台の上へスル／＼と上る。すだれ「よもつきじで舞い初める。終って入ると「ハイおだちんとお菓子をもらって装束をぬぎ、船べりへ、懐しい思い出です。或時流珠踊りを見学して来られた門

水翁の発案で、一度黒船でやってみよとの事になり、たしか「鳥指し」とか云った踊りだった。私に白羽の矢が立って舞った事がある。何か今考えてみると、木六駄のうづら舞に似たような型があつて一寸味なものだったように思う。

十五日の翌日は所謂「山車おろし」神楽団(お囃子の若旦那達)が様々な趣向をこらして慰労会である。町内全員を招いて、或は裸相撲大会とか、趣向をこらした作り物で、宴会とか、或は模擬店とか、揃の浴衣での慰安会は実に楽しい雰囲気でした。それも今は夢と消えた、山車は戦災をうけ焼失した、舞のみは伝統を守って今も連綿とつづいてる。

狂言万声

野村 広二

四月下旬から五月のはじめさわやかな季節となる。咲き出す花も初春の頃とすっかりかわった。都わすれの花が咲く。先き頃(二月)亡くなられた金剛殿氏母堂はこの花がお好きであった由。小さな紫の花を摘んで供える。高安流・西村弘敬氏も杜若やあやめを好まれたが、それももう間もなく開くであらう。

四月の中旬徳川美術館の能・狂言装束展に行く。途中いつものように禅寺・徳源寺へ立ち寄るが、人気のない寺内は、いろいろの縁に静まりかえっていた。「生死のうちに仏あれば生死な

し」(眼蔵・生死)。「小見は狐疑す」(信心銘)。「仏法は用功の処なし、ただ是れ平等無事、着衣喫飯、云々」(臨濟録・示衆)など口ずさむが、どうも第三のことばは確かでない。それらのもつかしいことばはそっとしておいて「男の心と大仏の柱は太きが上にも太かれ」(狂言披露)など口に出しながら、明るい日射のなかをまず逢左文庫へ。庭園の牡丹の蕾は、まだ青く固い。美術館の展示は見慣れた品々に出てなつかしい。翁と瘦女のオモテはすばらしく、美しいかすら帯もゆっくりみる。牡丹をみにもう一度来たいと思つた。二十五日は名古屋狂言小劇場。七回目の今回のテーマは「狂言は音楽だ」。おおらかで淡白な味の弘之(末広がり)と鋭角のうまくたみかけていく友彦(千鳥)両氏の対照がおもしろく、水汲(卯・秀)と鴨子(又・松)の二十分近い小謡の世界も味わいが深い。ほかに禁野(松・礼、観世会)不立腹(松・秀・礼、大槻十三追善能)をみる。不立腹は地味だが、その小味がよい。この追善会には千五郎氏が半蔵(立花供養、秀夫)と望月(文蔵)の間狂言を勤める。半蔵のはじめに立花供養をふれてふんい気をつくる十分ほどの舞台がまず妙。また屋島、(弓流、泉齋夫)の「奈須与市之語」(又)は折目をやわらかくつけて巧みに演じた。能は優美な千手(万紀夫)ほのかな情趣をただよわせた半蔵、カタのきれいな鶉飼(久共)すなおな望月を見る。極めて印象に残るのは六郎氏が十三氏にたむけた舞囃子。卒都婆

小町(肩衣・長袴)であった。五月一日熱田神宮舞楽神事。緑の森に包まれた舞台で抜頭(ぼとう、長谷晴男)還城楽(げんじょうらく、山本文彦)を拝見。久々お目にかかった羽塚堅子翁また内藤泰二氏と同席する。堅子翁は探桑老(たいそうろう)・奈良の春日さん、舞楽面ほかいりの話を元気に語られた。抜頭の途中舞台中央にうづくまり、楽だけ演奏される姿が能の居グセのように思われて興味深かった。放送は望月(友枝喜久夫)小鍛冶(桜間金太郎)日本の美・舞楽をみ、鳥追舟(松本謙三、いづれもNHK)をきく。ほかに題名のない音楽会(海外取材シリーズ四の一)アポロン賛歌と日本音楽、黛敏郎・観世栄夫・小泉文夫、名古屋テレビ)。本は古本で年々去来(久松潜一、年々去来の花・花と文学ほか、広濟堂出版)を得る。また劇・近世文学論考(石田元季、名古屋と能および狂言へ昭六、能をやるならワキを)狂言の価値・尾藩の狂言方・名古屋の能狂言八十三V謡より浄瑠璃へほか、至文堂、佳書)小林秀雄と先代万三郎の当麻(中村光夫、愛しとみしせ・37、東京四・二三)など。

六月の予告

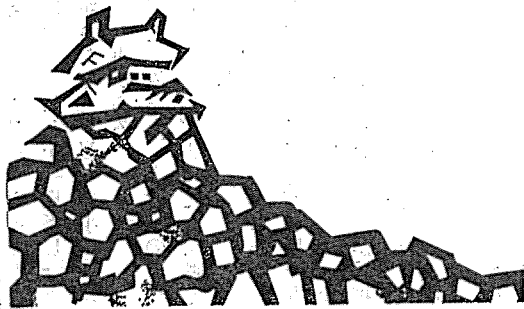
六月一日 一謡会 叶石会
能 安達原 川瀬 細子 高安 滋郎
六月二日 青陽会 友彦
能 芦刈 高橋 藤一 西村 欽也
能 雲雀山 佐藤 友彦
能 大野弘之 佐藤友彦 井上祐一
能 鶉飼 梅若 盛儀 高安 滋郎
能 蜘蛛盗人 井上祐一
能 井上松次郎 佐藤卯三郎

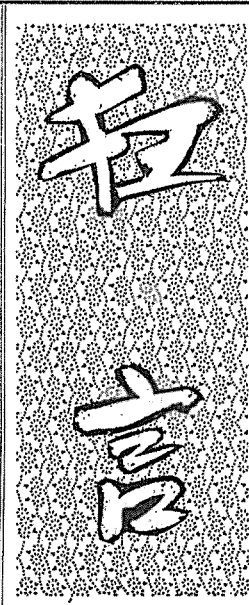
六月五日 熱田祭奉納能
能 枕慈童 竹腰 勝一 高安 滋郎
能 東北 服部 紗枝 西村 欽也
能 杭か人か 佐藤卯三郎 井上松次郎
六月九日 観世会
能 熊野 梅若 六郎 高安 滋郎
能 阿漕 大槻 秀夫 西村 欽也
能 空腕 茂山 正義 茂山 正義
六月十五日 宝生流学生会
能 半部 宝生 英雄
能 熊坂 辰巳 孝
能 花盗人 大野 弘之 井上松次郎
六月廿三日 和泉流狂言大会
※河村丘造師八十才祝賀
和泉流狂言大会(入場無料)
末広がり 大原紋三郎 佐藤 秀雄
附 子 津田省三郎 山本 慈吉
いろは 今枝 靖雄 今枝 郁雄
小舞 景 清 長谷川道雄
独吟 鶉 飼 清 石博 清一
萩 大名 八島 三男 鈴木 宗音
口真似 佐藤 融 佐藤 友彦
伯母ヶ酒 畑中 良雄 佐藤 秀雄
文 荷 歌村 鴻助 井上 祐一
清 水 鷺見 政行 佐藤 友彦
泉山伏 酒井 宏 水谷 利夫
小舞 うさぎ 石原 照久
福之神 伊藤 利彦 岡崎 久太郎
止動方角 大原紋三郎 松井 秀雄
六月卅日 観世会
能 衛会 天野友一郎 高安 滋郎
半能 融 山本 勝一

城

割烹・小料理

熱田能楽殿内喫茶部
・住吉小路(中区栄3-10)
電話 241-0248
・喫茶とグリル 労働文化センター内
電話 731-1128





昭和49年6月1日発行
 発行所
 名古屋市中区橋下町7-5
 井上重兵衛方 電(321)1430
 名古屋狂言共同社
 印刷所
 日東印刷工業株式会社 電(481)7445

狂言人語

参議院選挙の公示を控え、いよいよあつたらしいこの頃です。能狂言のこの世界も、近年は政治と無縁の世界と云ってはられません。様々な形で文化芸術の活動が圧迫され、困難となりつ

番組で繰り広げられます。どうか期待下さい。

観世流太鼓方鬼頭八郎氏は、此の春の叙勲でめでたく勲五等瑞宝章を受けられました。これを記念し、来る六月二十九日に熱田神宮能楽殿にて祝賀会を催されることとなりました。あらためてお祝い申し上げます。

暑中御見舞 狂言共同社

昭和四十九年盛夏

ある今日、その活動を政治の立場から保障し、援助される様な体制を作る様、真険に考ふる事が必要です。

扱、この六月二十三日は河村兵造師八十才祝賀狂言大会、狂言十一番他に小舞等の番組に、新城市狂言同好会を始め、玉石会、大声会、狂言共同社が参加し、河村兵造師の八十才を祝賀するものです。入場無料。どうかご来場下さい。

第十六回朝日狂言会が別掲の如く開催されます。大藏弥太郎、善竹玄三郎両師にその御子息を迎え、豪華多様な

六月の催能

| | | | | |
|-------------|--------------|-------|--------------|-------|
| 六月一日 一謡会 | 叶石会 | 能安達原 | 川瀬 緋子 | 高安 滋郎 |
| 六月二日 青陽会 | 能 刈 高橋 藤一 | 西村 欽也 | 能 雲雀山 佐藤 友彦 | 高安 滋郎 |
| | 能 大野弘之 佐藤 友彦 | 井上祐一 | 能 鶺鴒 梅若 盛哉 | 高安 滋郎 |
| | 井上祐一 | 高安 滋郎 | 能 蜘蛛盗人 井上松次郎 | 佐藤卯三郎 |
| 六月五日 熱田祭奉納能 | 能 枕慈童 竹腰 勝一 | 高安 滋郎 | | |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------------|-------|------------|-------|-----------|------------|-------|------------|-------|-------------|-------|---------------|------------|------------|-------|-----------|-------|------------|-------|----------------|---------------------------|------------|-------|-----------|--------|-----------|-------|--------|--------|-------|--------|-------|------------|-------|----------|-------|------------|-------|-----------|-------|-----------|-------|----------|-------|--------|-------|-----------|--------|------------|------|-----------------|-------|-------|------------|-------|-------|
| 能東 北 服部 紗枝 | 西村 欽也 | 能杭か人 佐藤卯三郎 | 井上松次郎 | 能六月九日 観世会 | 能熊 野 梅若 六郎 | 高安 滋郎 | 能阿 濶 大槻 秀夫 | 西村 欽也 | 能空 腕 茂山 千五郎 | 茂山 正義 | 能六月十五日 宝生流学生会 | 能六月十六日 宝生会 | 能半 蓼 宝生 英雄 | 高安 滋郎 | 能熊 坂 辰巳 孝 | 西村 欽也 | 能花盗人 佐藤卯三郎 | 井上松次郎 | 能六月廿三日 和泉流狂言大会 | ※河村兵造師八十才祝賀 和泉流狂言大会(入場無料) | 末広かり 大原紋三郎 | 山本 憲吉 | 附 子 津田庄三郎 | 中北 宇多子 | いろは 今枝 靖雄 | 今枝 郁雄 | 小舞 景 清 | 長谷川 道雄 | 石博 清一 | 独吟 八 島 | 鈴木 宗音 | 萩 大名 原田 三男 | 佐野元之助 | 口真似 佐藤 融 | 佐藤 友彦 | 伯母ヶ酒 如中 良雄 | 権田 重茲 | 文 荷 歌村 鴻助 | 井上 祐一 | 清 水 鷺見 政行 | 佐藤 友彦 | 泉山伏 酒井 宏 | 小田 正一 | 小舞 うさぎ | 石原 照久 | 福之神 伊藤 利彦 | 岡崎 久太郎 | 止動方角 大原紋三郎 | 林 東助 | 六月廿九日 鬼頭八郎叙勲祝賀会 | 天野友一郎 | 松井 秀雄 | 六月卅日 綱 衛 会 | 山本 勝一 | 高安 滋郎 |
|------------|-------|------------|-------|-----------|------------|-------|------------|-------|-------------|-------|---------------|------------|------------|-------|-----------|-------|------------|-------|----------------|---------------------------|------------|-------|-----------|--------|-----------|-------|--------|--------|-------|--------|-------|------------|-------|----------|-------|------------|-------|-----------|-------|-----------|-------|----------|-------|--------|-------|-----------|--------|------------|------|-----------------|-------|-------|------------|-------|-------|

狂言解説

蜘蛛盗人II狂言の盗人はどこか間の抜けているものです、これも忍び入った所を家人に見つけられ、あわてて逃げまどう内に蜘蛛の巣にひっかかって動けなくなってしまう。そこで詠んだ歌一首、思わぬ盗人の風流心に感じた主人は、これをゆるして酒盛りが始まります。狂言には珍しく、蜘蛛の巣の造り物が出されます。

杭か人がII日頃から空腕立てをする冠者に留守居を云い付け、主人は外出しました。日が暮れた屋敷の周囲を見廻る太郎冠者はおっかなびっくり。闇の向うにぬっと立ちほだかる物影は人の様でもあり、杭の様でもあり、「杭か人か」と尋ねると「杭」という返事が返って来ました……。

空腕IIこれも空腕だてをする冠者を試さんと、淀まで魚を買いにやりました。夜道にかゝった太郎冠者には、立木も草むらもすべて盗賊に見える次第。遂には様子を見てやっ来て来た主人を盗賊と間違え、主人から預った大事の太刀を差し出して命途を断る始末。呆れて帰宅した主人に、後から戻った太郎冠者は何くわぬ顔で、いつもの通りの手柄話を始めます。

花盗人II花盗人にやられた主人、今夜は庭先に忍んでいる所へやっ来て来た盗人をまんまと捕えて桜の幹にしばりつけました。花の下に縛られた盗人は例によって歌一首、また、主人は盗人と酒盛りを始めます。

これも造花の造り物が出されます。

中島八十次郎氏を偲ぶ

徳川美術館学芸員

大河内定夫



能・狂言装束を長年の間織られた京都の中島八十次郎氏が、今年の四月八日に

逝去された。中島氏は明治三十六年生れて、十二才頃から父親である米吉氏の膝元で、糸錦・有職織物、能装束等の厳格な修業を収め、五十九年間織物一筋に生き抜いた人である。

戦前は能装束と共に皇宮職の御用品に力を注ぎ、お下げ糸による有職織物を数多く織り出したが、ことに氏の独壇場とでもいえるものは糸錦である。糸の染色は全て自分で行ない、その方法は草木染を重視して独特の染法を研究されていた。ときには材料に玉葱の皮、茄子の葉とか茎、栗のいが、よもぎ、ざくろの実などを使用して微妙な色相とその明暗を敏感に掴み、日本画の持っている華麗な色彩感と洗練された線描の優美さをそのまま、織物に再現した。この糸錦の美しさは、伝統的な日本の美意識を底に秘めた貴重な織物で、宮中でご使用のほか、皇族方が外国へお出掛けの折の贈呈品に充てられたと伝えられる。

職人としての自覚に徹した人であったからこそ、脇目もふらずに仕事に精魂を傾け、図柄にしてもお下げ渡しの下図を尊重しながら、自然の観察を基

盤として自身の創意を盛りこみ、独自の作品を織り上げることが出来たのである。昭和十五年に文化勲章の生地を織り上げてから戦争の為(七、七禁令)に一時休業し、戦後にまた能装束を主として、糸錦及び有職織物に復業し、観世宗家及び京都観世流織物片山家を初めとして能楽師、狂言師の方々の厚遇を受け

唐織・厚板・狩衣・長絹・側次・熨斗目大口など気の向くままに織り上げ珍重された。徳川美術館にも能装束展の開催される折々に足を運ぶ、熱心に観察をされ、感銘の薄れないうちに京都へ帰って仕事をしたいと漏らされたこともある。新規に織り上げるばかりでなく、古い装束の修理なども手がけられ、褪色した装束の色相のこ

ととか、仕立直しの場合に相談をされた時の氏の目の輝きは、今も脳理にやきついていて忘れられない。
西陣で能装束の唐織を織る人達も数少くなり、技術の継承を真剣に考えねばならないときである。技術保持者が唐織を織ることに誇りを持って仕事が出

第十六回

朝日狂言会

昭和四十九年七月十四日午後一時
於 熱田神宮 能楽殿
二人大名 大蔵弥太郎 善竹 長徳
男舞 後藤孝一 藤田六郎兵衛

宗論

佐藤卯三郎 井上祐一
井上礼之助 大野弘之
井上松次郎 佐藤友彦

賞錚

善竹玄三郎 善竹長徳
大蔵基嗣 野村又三郎

狐塚

和泉 保之 野村又三郎
佐藤秀雄

会費 指定席 一、二〇〇円
普通席 八〇〇円 階上席 五〇〇円
取扱所 朝日新聞名古屋本社企画部
電話 八一一一
中区橋一丁目七―五 井上芳
電話 一四三〇
各出演楽師宅 各ブレイガイド
六月上旬発売

来るよう我々一人一人が留意すると共に、国に於ても万全の配慮が必要である。これを怠ると日本の伝統芸能の一つである能・狂言は装束によって滅亡するといっても過言ではない。唐織はもとより緋精好の袴地一つ取り上げてみても品質が低下するばかりである。いずれは装束を着用しても腰のあたりでのむっくりした味わいが出なくなり、長袴着用は見ると堪えぬものになる。中島氏もここ数年は唐織を織らず、専ら糸錦に打込み、講談社本の源氏物語絵巻を参考にして「竹河」他優美な五場面を選んで苦心の末に完成された。

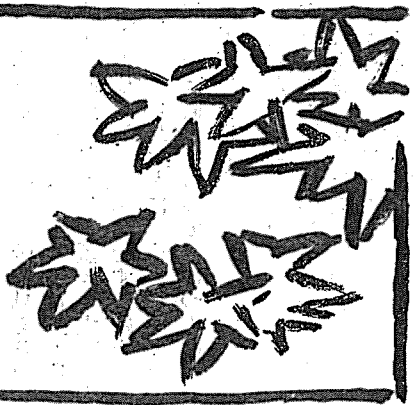
中島氏逝かれて二ヶ月あまり、折々の思い出は尽きることがない。ご冥福をお祈りしている昨今である。

なお四月八日の死亡の日に勲五等瑞宝章を授与せられ、ご本人は遂に知られずに逝かれたが、生前名利を追わなかった人としての気概を覗かせられた思いがする。

× × × × × × × ×

司子茶舗 新茶

中区丸の内一丁目五ノ二三
② 五七六九



狂言万声

野村 広 二

梅雨の季節がやってきた。泰山木の白、杏竹桃の紅い花が咲く。あじさいも色をつけてくる。近頃頭痛風と風邪でしばらく外出を控えたが、土・日の朝には能楽堂へ行けないのが何とも寂しくなる。涼しい風がよく通る日中横になつてると、色々の想念が大小の雲のように起つては消えていく。これはいいと書き止める暇もない。そのなかに、「腰よりようじよう抜き出し」(清経)、「三瀬川」(松風)、「四条五条」(熊野)、「山時鳥の一声も」(一念の窓の前)、「大原御幸」(今宵の秋風身にしみじみと)、「姨捨」(関寺の鐘)、「関寺小町」(鐘の声きけば)、「三井寺」(ひすいのかんざし)、「白黒のくわい」(浄衣の袴かいとつて)、「これにつけても後の世を」(卒都婆小町)、「休む重荷に肩をかし」(妄執の雲の塵つもつて)、「山姥」(そのほかのことばが頭に浮んでは去る。狂言の「それお声じや」(未広がり)、「伊勢白粉」(素襖落)、「あおぐぞあおぐぞ」(附子)、「ちりちりやちりちり」(千鳥)、「男の心と大仏の柱」(抜敷ほか)、「五十展転隨喜の功德」(一念弥陀仏云々)、「宗論」(平等院の緑の下)、「通円」(そちちちも休ませ)、「木六駄」(今更思ひ知られたり)、「月見座頭」(暁の明星)、「小舞謡」などのことばがそれらに入りまじる。テレビの「花ぐるま」(KHK)に出演し、義太夫の文句で、万事万端見事に片付けてい

くあの郵便局員の肥後さん(上方柳太)の心境には遠く及ばないが、能や狂言のみどころきまごころとは限らないしかも印象深い風景が何層にも去来した。それでも少しよくなると、ステッキを持つて出掛けるが、帰りは大変苦勞する。だが舞台をじつと見てみるときは、狂言や能の千変万化で心がゆたかになる。狂言は明るくたつぷり味のある空腕(千五郎・正義、観世会)に今枝郁雄・靖雄少年の純心でのびのびとした「いろは」(武田宗次郎三十三回忌追善、鳳鳴会)、能は端正な詩情あふれる熊野(六郎、観世会)風格の高い山姥(片山博太郎、邦謡会)を見ただけで、河村大・真之介少年による独調(一謡会・叶石会共催)や鶴飼盛義、青陽会)の間狂言に來名した井上祐一氏の語り、蜘蛛盗人・杭か人か・花盗人(松次郎・卯三郎、青陽会・熱田祭奉納能・宝生会)の続けて三番を見逃す。「いろは」は也留舞(やるまい)会の社中会でもみる(加納浩行・保一、祖父と孫)。おもしろかった。さて先きに古書で得た「年々去来」(久松潜一)を熟読玩味する。佳篇揃い。前述(前号)のほか大雅と玉瀾・わが愛読書・読書遍歴・松浦一先生の思出(先生と一緒に能をみる)など何度もくり返す。私が谷川徹三先生からおそわつたR・G・モウルトンの「文学の近代的研究」の書名もでて(国文学界回顧)なつかしかった。失礼ながらあの筆致から亡き父の佳き面影を行間にしのんだ。そして大法輪の六月号がでると、巻頭言に「生死のなかに

仏あれば生死なし」(正法眼蔵、修証義)の書を読みつけて早速入手「年々去来」と重ねて手許におく。この頃の本(雑誌)といえば、書店にでてすぐ買わないともう手に入らない。中世近世歌謡集(日本古典文学大系、岩波)を大きな書店に頼んだところ、日がたつて「品切、出来目未定」の返事をもたらしたので、歩るけるようになつたら少し探そうと思つた矢先新聞(朝日)に同全集の全巻広告を大きく見つけた。ないとなるといつもよけいにほしくなる。次は「劇・近世文学論」(石田元季)を手から放さなかつた。名古屋の狂言のことを刻明にしかもねんごろにお書きになつてゐる。また名古屋の芸能が舞楽・平曲・能と狂言そして江戸邦楽と続いて榮えてきたことも含蓄に富む文章で語られ、やさしく呼びかけておられる。私がNHKで邦楽番組をつくつていた時の諸経験から、舞楽に始ま

第九回

薪能

昭和四十九年八月三日(土)午後五時卅分始

於 熱田 神宮 神楽殿 前

能 組

野 屋 島 杉村 竹翠 地謡

野 宮 塚本 秀雄 地謡

杜 若 前田 茂穂 地謡

班 女 小島 一英 地謡

野 守 柴田 牧武 地謡

竹生島 水谷 泰典 吉田 定男 柳原 富司忠 地謡

和谷 衡市 磯 吉田 定男 藤田 昭彦

放下僧 西村 欽也 山口 亮 藤田 昭彦

後見 和島富太郎 地謡 小泉 靖男 富田 陽二

梅田 邦久 大島登志子 川井 直宏 山本 榮才

半 部 高安 勝久 寛 敏一 後藤 孝一郎 藤田 六郎兵衛

後見 柴田 牧武 地謡 長谷川 章 佐藤 末次

樋の酒 井上松次郎 大野 弘之 後藤 孝一郎 藤田 六郎兵衛

中村 靖弘 後藤 孝一郎 藤田 六郎兵衛

衣斐 正直 高安 滋郎 福井 良一郎 池田 三男

船 辨慶 飯富 雅介 稻川 寿一 吉田 俊彦

後見 竹内 弘子 地謡 加藤 勝一 戸田 義久

玉井 弘子 地謡 加藤 勝一 戸田 義久

後見 竹内 弘子 地謡 加藤 勝一 戸田 義久

後見 竹内 弘子 地謡 加藤 勝一 戸田 義久

後見 竹内 弘子 地謡 加藤 勝一 戸田 義久

後見 竹内 弘子 地謡 加藤 勝一 戸田 義久

後見 竹内 弘子 地謡 加藤 勝一 戸田 義久

後見 竹内 弘子 地謡 加藤 勝一 戸田 義久

後見 竹内 弘子 地謡 加藤 勝一 戸田 義久

後見 竹内 弘子 地謡 加藤 勝一 戸田 義久

後見 竹内 弘子 地謡 加藤 勝一 戸田 義久

つて他国(都市)にない貴重な古典芸能が今も墨守され、一貫して現存しているのを誇ってきたが、石田先生の書を開くや、わが大言の誤っていないか、たことを教えられて大層うれしかった。「狂言はよき人のよき笑いである」(狂言の価値)波形本・雲形本や狂言共同社のこと(名古屋の能狂言)など。また後者には野村又三郎家に越後舞(九代目又三郎作、藤田流の笛で獅子を舞う、大藏流の獅子舞も付記)のあることにもふれられる。以上寸見である。狸々の「汲めども尽きず」の感が深い。他方芸術新潮(六月)の「ドラム挿画・ラブレのパンタグリユエル物語特集」(解説・渡辺一夫)に狂言と通ずる明るさや笑いや風刺をみ出す。これは今岩波文庫で三冊目(渡辺一夫訳)まででてくる。戦後絵入りの立派な本が出版されたのを「随筆・道成寺」津村秀松、映画批評家Q氏尊父(良書)ともどもなくしてしまったのが昨日今日のように思い出される。

催しは夏の院展(松坂屋)で「月魂」(森田敏平)江戸娘(北沢映月)雪(中村貞以)薄紅梅(奥村土牛)古事記(十五枚連作の四枚目・天の石屋戸へうずめ)、前田青町)にみられる。梅原竜三郎絵画展(丸栄)にも。梅原さんと同じ調子の能を舞うシテは一体誰であろうと考えながら画廊をはなれた。

去る五月名古屋の広瀬瑞瑠(よしひろ、金春流)氏が奈良興福寺の境内西金堂のあとに「薪能金春發祥地」の碑を建てられた。「能と金春」「短歌集

・春敵門(しゅんこうもん)「につづく研さんの美しい結晶とお祝いしたい。建つまでに一年有余の年月がかかった由。その間のお骨折りは並大抵(たいてい)ではなかったと思う。くわしくは次号で。

放送は「文化展望・能面を打つ」(能面師谷口明子・滝井孝作・野村万蔵ほか、NHK)をみる。本は「志賀さんの生活など」(秘曲・サギほか、滝井孝作、新潮社)沈黙の日本美(吉村貞司、毎日、能・人間性のドラマほか)モナリザと孫次郎(三宅藤九郎、能楽タイムズ六月)ハワイ三か月(野村万作、同)芭蕉山河・閑さや(25回謡曲芭蕉、加藤楸邨、朝日六・十一)火の回路(第三三八回、謡曲西王母、松本清張、朝日五・二四)高校生と能(若者のための能楽鑑賞会・NHKホール、東京六・六)能楽案内(同手引書、増田正造、東京六・十)など。

七、八、九月の予告

七月 六日 麦の会
 七月 七日 淡交会夏の会
 七月 十四日 朝日狂言会
 七月 廿七日 九阜会
 能 百 万 吉田 妙 西村 欽也
 能 通 小 町 観世 喜之 高安 滋郎
 能 鎌 腹 佐藤卯三郎 井上礼之助
 八月 三日 薪 能
 八月 十八日 官実連合素謡会

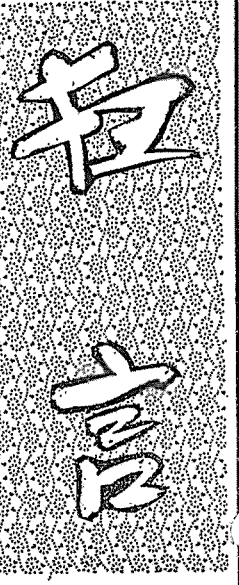
九月 一日 大衆能
 於文化講堂
 九月 五日 大舞台
 於名演小劇場
 九月 八日 観世会
 能 井 筒 観世 元正
 能 高安 滋郎
 能 玄 象 武田太加志
 西村 欽也
 能 大野 弘之
 能 雁 大名 野村又三郎
 佐藤 秀雄
 井上礼之助
 九月 十五日 黓雲会
 九月 廿二日 潤水会
 九月 廿三日 中部金剛会
 九月 廿八日 九阜会
 能 半 部 高木美智子
 西村 欽也
 能 紅 葉 狩 観世 武雄
 高安 滋郎
 能 佐藤 友彦
 大野 弘之
 能 隠 狸 佐藤 秀雄
 佐藤卯三郎
 九月 廿九日 青陽会

第十五回 大衆能

昭和四十九年九月一日 午後一時始
 於愛知文化講堂

| | | | | | | | |
|--|--|--|--|--|--|--|--|
| 高橋 政一 地謡 河村總一郎 | 高 砂 本田 光洋 山口 亮 河村總一郎 | 天 鼓 梅田 邦久 地謡 | 隅 田 川 柴田 牧武 地謡 | 唐 船 加藤 良久 地謡 | 松 風 熊沢恵美子 地謡 | 能 組 於愛知文化講堂 | 生駒美代子 高木滋智子 高木美子 服部 紗枝 吉田 和男 中村 英 小島 武 杉村 翠 |
| 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 |
| 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 |
| 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 |
| 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 |
| 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 |
| 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 | 後見 加賀 敏彦 柴田初太郎 地謡 長谷川 章 長谷川 章 後藤 武 岡田 光紘 |

指定席 一、三〇〇円
 学生会 五〇〇円
 普通席 一、〇〇〇円
 主催 能楽協会名古屋支部



昭和49年9月1日発行
 発行所
 名古屋市中区橋下町7-5
 井上重兵衛方 電話(321)1480
 名古屋狂言共同社
 印刷所
 日東印刷工業株式会社 電話(481)7445

狂言人語

市内中区栄五丁目に栄能楽舞台竣工
 九月十九日に盛大に竣工式。舞台披が
 催される。能楽愛好家にとっても此上
 ない朗報である。衷心より祝意を表し
 たい。

過日、ふとした機会に別掲の如き古
 き能番組が手に入りましたのでご紹介
 します。名古屋博物館に開設された能
 楽舞台披きの時のもので、その盛大さ
 がうかがわれると同時に、懐かしい名前
 に往時が偲ばれるものです。なお「能
 仁新報」がどの様なものであったか、
 不明ですが、ご存じの方がいましたら
 らご教示いただければ幸いです。

九月の催能

- 九月一日 大衆能
 能経 政 高橋 瞭一 高安 勝久
 能熊 野 久田 秀雄 高安 滋郎
 能春日龍神 吉田 俊彦 西村 欽也
 能 野村又三郎 佐藤 秀雄 佐藤卯三郎
- 九月五日 大衆能
 能文 蔵 野村又三郎 井上松次郎
 能有楽煉 大野 弘之 鷺見 政行
 能奈須語 佐藤 友彦 佐藤 秀雄
 能宗 論 井上礼之助 佐藤 秀雄
- 九月八日 観世会
 能井 筒 観世 元正 高安 滋郎

- 能玄 象 佐藤 友彦 西村 欽也
 能雁 大名 大野 弘之 井上礼之助
 能半 薔 木全 正江 高安 滋郎
 能班 女 長谷川美智子 西村欽也
 能山 姥 井上松次郎 佐藤 友彦
 能お 冷 内藤 泰二 高安 滋郎
 能九月廿二日 潤水会
 能九月廿三日 中部金剛会
 能小 督 松野 恭蔵 西村 欽也
 能天 鼓 佐藤 友彦 高安 滋郎
 能伯 養 井上礼之助 高安 滋郎
 能九月廿八日 九阜会
 能半 薔 高木美智子 西村 欽也
 能紅 葉 狩 観世 武雄 高安 滋郎
 能 野村又三郎 佐藤 友彦 大野 弘之
 能九月廿九日 青陽会
 能田 村 柴田 牧武 高安 勝久
 能野 宮 浦田 保雄 高安 滋郎
 能舟 弁 慶 佐藤 友彦 高安 滋郎
 能雁 磔 大野 弘之 西村 欽也
 能井上礼之助 井上松次郎

狂言万声

野村 広二

夏は果物を実によく食べた。八月の
 お盆すぎはいちぢくも。庭にできる赤
 と白の両方を早朝か夕方にもぎとる。
 短かい夏と雨のせいか甘く熟すのが少
 ない。それでも新鮮な赤い方の実を天
 ぶらにして食膳をにぎわした。これは
 昨年茂山千五郎氏が料理の時間(NHK
 K)で披露された好物、傑作のひとつ
 である。美味。白い方も近々用いた
 と楽しみにする。さて、夏の演能は八
 月鋭い通小町(喜之、九阜会)とわか
 り易い鎌腹(卯・礼・友、同)をみる。
 七月は朝日狂言会。感想は朝日(七・
 一五)に記したので省くが、熱心な盛
 会振りがかかった。六月は河村丘造氏
 の八十の賀を祝する狂言会。丘造氏は
 病氣養生中で惜しくも楽屋にその姿を
 みることはできなかったけれども、舞
 台が終って、出演者と親しい方大勢が
 ひと言づつ「おめでとう」の声を録音
 して届けることにした。可愛い孫の照
 久君があどけない姿で小舞・うさぎを
 みせる。狂言十番、真剣にかつ品よく
 舞われて実に楽しい会となった。それ
 から鬼頭八郎氏叙勲祝賀会には共同社
 は小舞・貝尽し(松)をおくる。なお
 前号で「新能金春禊祥地」の碑のこと
 を紹介したが、施主の広瀬瑞弘氏から
 その写真を数葉贈られる。表は頭書
 の通り信高氏が染筆、もうひとつの側
 は施主の書いた建碑のいわれが、いつ
 までも伝わるよう深く刻まれている。
 床しく見事であることを簡単な書
 き添えたい。また八月になって新能が
 おこなわれた。本年は新趣向を加え、
 盛会であった由。

七月末にM教授が名古屋北區のわ
 が町より尾張旭市へ転宅された。鶯や
 百舌の鳴くわが町よりもっと緑の多
 いところである。雨模様之夜、お別れ
 の会食に歌村鴻助氏の「つる軒」へ行
 く。亭主自慢の味噌おでんを前に話の
 方も忙しかった。持参した源氏物語の
 うち、帚木・雨夜の品定めのところ左
 馬頭が語る美術論によせた女性観と指
 喰女のあたりを続んでいた。夜の
 更るのも忘れた。

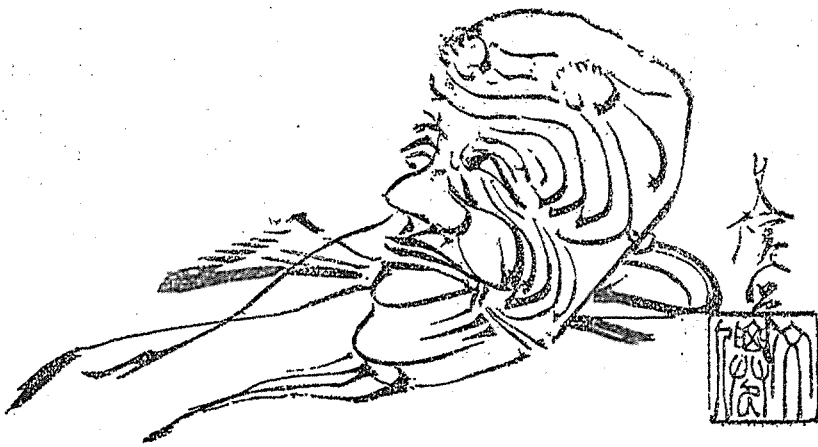
七月十九日宝生九郎氏逝去。戦後の
 名古屋能楽界の復興に大きな努力を払
 われたことは今も記憶に新しい。名古
 屋演能資料(お能の番組、田鍋惣太郎
 編)に重英の名がはじめてみ出される
 のは大正六年(小袖曾我、乾三・重
 英、呉服町能楽俱樂部)。私は十七年
 に藤戸(布池能楽堂)を拝見したのが
 最初であった。そして、戦後名古屋の
 演能舞台が仲ノ町小学校の講堂をはじ
 め転々と変っていった頃、演能では藤
 戸(二十一年)杜若(二二)松風・景清
 (二三)、市立第一高女講堂)蟬丸(二
 四、名商工会議所ホール)それから盛
 久(二五)鉢木(黒頭、二二)高砂(作
 物出、三〇)、以上松坂屋仮設舞台)な
 どを。そして宝生流久々の道成寺を今
 の熱田・能楽殿の新しい舞台で舞っ
 た。蟬丸のときは故兼資氏の砧、鉢木
 のときはその別習一調夜討曾我(小鼓
 ・田鍋惣太郎)が見所を渡かせた。そ
 の後は年毎に充実をみせてきた名古屋
 宝生会・名匠鑑賞能・朝日五流能・中
 日五流能に活躍された。東京では鶯鷓
 小町をみせていただいた(二四、先代
 九郎追善・九郎製名)。テレビ能出演
 (NHK)はどうも思い出せない。晩
 年楽屋で対座すると、足のやや不自由
 なことを物柔かいことばで告げられ
 た。西行桜のシテ、「これは夢かや」

當博館蔵
能楽舞臺

↑ゴム印

明治二十七年六月七日發行

能仁新報 第二百四附録



明治二十七年六月十日 午前七時始り

初日

能組

翁 面箱 井上光太郎
三番叟 山本弘太郎

明治廿七年六月十一日 午前七時始り

二日目

能組

翁 三番叟 井上菊次郎
千歳 三橋正太郎

青山鏡治郎 打掛り 鬼頭爲太郎
賀茂 杉山義敬 山岡正吉 藤田 清丸

素働 御田 山脇 元清
鍋八撥 伊勢 門水
薩摩守 河村保之助

觀世清廉 立花一枝 飯田 具命
安宅 西村大藏 林吉兵衛

觀進帳 瀧流し 古澤廓之助
雷 狐 藤井六三郎

柴田慶彦 角田銘二 鬼頭爲太郎
道成寺 杉山義聞 大倉六藏 藤田清治郎

朝比奈 三人片輪 山脇 元清
三人片輪 井上鉄治郎

鞍馬 杉山義聞 吉田方條 鬼頭八郎
天狗 白頭 林吉兵衛 藤田米治郎

附祝言 鬼頭八郎
藤田米治郎

明治廿七年六月十二日 午前七時始り

三日目

能組

風流千歳 武山鎮三郎
面箱 山脇 元清

木村治一 三番叟 伊勢 門水
天地和合之舞 大岩 如年

千歳 如年

千歳 如年

千歳 如年

千歳 如年

千歳 如年

(隅田川)の謡が忘れられない。ご冥福を祈る。

本は能・狂言(第五号・田鍋惣太郎追悼特集、竹尾邦太郎、力作、寄贈)ほか。

(名古屋博物館)明治十一年九月十五日開館。門前町総見寺境内に在った。

この後明治四十年に改築計画がたてられ、同地に四十四年一月愛知県商品陳列館として開館、以後永く市民に親しまれた。これに先立ち能楽堂は明治四十二年兵部町に新設されている。

(番組の「当博物館内能楽舞台開」の文字はゴム印で押したもの)

(狂言方)

狂言方は明治二十四年に狂言共同社を結成して間もない頃であり、最も意気盛んな時代であった。番組立てを見ても狂言方が大いに巾をきかせていたことがうかがわれる。

△山脇元清 九代山脇和泉元清。明治十四年名古屋から東京へ移住。以後東京で活躍することとなったが、同流三宅派の地盤の中ですこぶる振わないま、明治四十四年六十三才で没す。

△野村又三郎 九世又三郎信茂。安政五年家督相続し、維新後は大阪に住んだ。明治四十年七十三才で没す。

△野村広之助 信茂の息。後の第十世又三郎信英。大正六年に上京し、以後東京で活躍した。昭和二十年八十一才にて没。その息が現又三郎信広である。

△外堀新太郎 本名角淵宣。山脇得平弟子で明治四十年に山脇弟子家の芸事相続を許される。本職は弁護士で名古屋市の第二期市議員まで勤めている。

明治十七年「狸腹鼓」上演している。
△井上菊次郎 初代菊次郎。早川幸

翁 能組
 面箱 井上光太郎
 三番叟 山本弘太郎
 千歳 柴田 穀彦

觀世清康 吉田方條
 高砂 西村大藏 大倉六藏
 末廣 藤田清次郎
 しびり 山脇 元清
 花盗人 吉田梅三郎
 三橋正太郎

加藤半外 西 東平
 草紙洗 越川吉之丞 山岡正吉
 小町 安藤鏡太郎
 井杭 外堀新太郎
 金岡 岡谷清次郎
 若菜 鬼頭 八郎
 間 藤田米次郎
 若菜 河村健三郎
 若菜 武山鎮三郎
 若菜 藤井六三郎
 若菜 古澤廓之助

望月 杉山義敬 角田銘二
 大倉六藏
 木村治一 立花一枝
 杉山義樹 林吉兵衛
 附祝言 鬼頭爲太郎
 清丸

木村治一 立花一枝
 杉山義樹 林吉兵衛
 附祝言 鬼頭爲太郎
 清丸

木村治一 立花一枝
 杉山義樹 林吉兵衛
 附祝言 鬼頭爲太郎
 清丸

木村治一 立花一枝
 杉山義樹 林吉兵衛
 附祝言 鬼頭爲太郎
 清丸

木村治一 立花一枝
 杉山義樹 林吉兵衛
 附祝言 鬼頭爲太郎
 清丸

木村治一 立花一枝
 杉山義樹 林吉兵衛
 附祝言 鬼頭爲太郎
 清丸

木村治一 立花一枝
 杉山義樹 林吉兵衛
 附祝言 鬼頭爲太郎
 清丸

木村治一 立花一枝
 杉山義樹 林吉兵衛
 附祝言 鬼頭爲太郎
 清丸

木村治一 立花一枝
 杉山義樹 林吉兵衛
 附祝言 鬼頭爲太郎
 清丸

木村治一 立花一枝
 杉山義樹 林吉兵衛
 附祝言 鬼頭爲太郎
 清丸

木村治一 立花一枝
 杉山義樹 林吉兵衛
 附祝言 鬼頭爲太郎
 清丸

木村治一 立花一枝
 杉山義樹 林吉兵衛
 附祝言 鬼頭爲太郎
 清丸

翁 木村治一 三番叟 山本元清
 天地和合之舞 伊勢 門水
 千歳 大岩 加年

毛利治郎太 角田銘二
 恒川吉之丞 林吉兵衛
 二人袴 飯田具命
 柿山伏 山本弘太郎
 止動方角 岡谷鉄三郎
 井上菊治郎

片山九郎三郎 立花 一枝
 夜討管我 武山健之助
 石 大藤内
 牛盗人 外堀新太郎
 石神 田中庄太郎
 觀世清康 河村文太郎
 柴田 藤田米次郎
 柴田 大倉六藏
 大獅子 野村又三郎
 唐人力 山脇 元清
 喜多六平太 野村廣之助
 船辨慶 加藤十郎
 間船中之語 林吉兵衛
 附祝言 井上菊治郎

木村治一 立花 一枝
 三番叟 伊勢 門水
 天地和合之舞 大岩 加年

木村治一 立花 一枝
 三番叟 伊勢 門水
 天地和合之舞 大岩 加年

木村治一 立花 一枝
 三番叟 伊勢 門水
 天地和合之舞 大岩 加年

木村治一 立花 一枝
 三番叟 伊勢 門水
 天地和合之舞 大岩 加年

木村治一 立花 一枝
 三番叟 伊勢 門水
 天地和合之舞 大岩 加年

木村治一 立花 一枝
 三番叟 伊勢 門水
 天地和合之舞 大岩 加年

木村治一 立花 一枝
 三番叟 伊勢 門水
 天地和合之舞 大岩 加年

木村治一 立花 一枝
 三番叟 伊勢 門水
 天地和合之舞 大岩 加年

木村治一 立花 一枝
 三番叟 伊勢 門水
 天地和合之舞 大岩 加年

木村治一 立花 一枝
 三番叟 伊勢 門水
 天地和合之舞 大岩 加年

木村治一 立花 一枝
 三番叟 伊勢 門水
 天地和合之舞 大岩 加年

木村治一 立花 一枝
 三番叟 伊勢 門水
 天地和合之舞 大岩 加年

注 右番組中喜多六兵衛の役はずべて寺田左門治師代勤ゴム印にて訂正

八弟子。明治四十年早川家芸事相統。家業仏具商。晩年は家業を譲り単身上京して狂言に専心する。軽妙洒脱なその名人芸は東京の専門狂言師達の心胆を寒からしめたと云う。大正九年没。七十五才。

△伊勢門水 本名水野代次郎。早川幸八弟子。家業旗商。狂言を演ずるかたわら御酒落会々の中心メンバーとなり一大奇人、風流人として逸話も多い。「名古屋祭」「末広町話」「和泉流狂言記」等を遺し、また、狂言画は特に有名であった。昭和七年没、七十才。

△河村健三郎 九世又三郎信茂に入門。本業酒造商。角淵、初代菊次郎、門水等と共に共同社設立に参加、以来社中のとりまとめ役を果し、書記、会計、装束の保管の役まで引き受けた。昭和十五年没。七十八才。その息が現丘造である。

△三橋正太郎 不詳。共同社創立に名を連ねており、早川幸八の弟子だったらしい。声の細い人で明治三十五年頃まで活躍している。
 △田中庄太郎 不詳。共同社創立に名を連ねている。山脇得平門下、身体が大きくな人、そのわりに身が非常に

軽く色んな働きの出来る人だったと云う。この後狂言方に名前が見られなくなり明治三十九年頃から金剛流シテ方に数年間同名の名前が見られる。或は同一人物かもしれない。

△河村保之助 河村健三郎甥、酒問屋を営む。身の軽い人で、水車や、唐人相撲の吹き抜きなど苦もなく演じたという。健三郎に師事し「釣狐」まで抜いたが、昭和四年四十八才にて没。
 △井上鉄次郎 初代菊次郎二男。大正十一年、初代菊次郎の追善会で「釣狐」を抜き、同年二代目菊次郎を襲名。以後新三郎と共に共同社を統率し

たが昭和十五年没。当時まだ子供（十一才）で「朝比奈」を演じている。その息が現松次郎である。
 △山本弘太郎 長じて権次郎。門水弟子。森岡屋の屋号を持つ当時足袋あつし等を商う太物問屋。三番叟を勤めたのが抜きで、当時十五才であった。
 △井上光太郎 初代菊次郎長男。明治十六年にすでに那須語を演ずる。
 △河村文太郎 健三郎弟子、健三郎家の分家筋に当り、健三郎従兄弟、伏見町で酒造商を営む。
 △吉田梅三郎 紙新の屋号を持つ太物商河村家の縁戚に当り、健三郎弟子
 △武山鎮三郎 角淵弟子。
 杉の町で綿糸商明治十六年頃子供狂言で舞台上上つてから、明治四十一年頃まで舞台を続けている。

△岡谷清次郎 門水弟子。後の岡谷惣助。子供狂言として狂言を習う。
 △藤井六三郎、古沢廓之助 不詳。
 藤井六三郎については名古屋の能番組に二度その名が見出されるいずれも又三郎来名の時に限られ、又三郎の関西の弟子かと思われる。
 △岡谷鉄三郎 岡谷家の分家（シテ方）

△観世清兼 第二十三世観世宗家。この当時二十八才。明治四十四年没。
 △寺田左門治 金剛流。尾州家御抱寺田家六代目。嘉永三年家督をつぎ金剛流大夫となったが維新後上京。家元鈴之助が関西にいた間、よく孤墨を守り、事ある時は金剛流を代表した。大正五年名古屋に帰り、同十一年七十九才で没した。
 △柴田穀彦 尾州家お抱えだった二代目木下正三郎門下。その後上京し家元の門に入り、観世清孝の免許を得て

婦名した。明治二十九年には愛知、岐阜、三重、静岡各県下観世流弟子取立職分取締、同年東京能楽会楽師となす。その息柴田邦彦も楽師として活躍。青山山鏡治郎は古屋在任。赤塚で砂糖店を営むかたわら観世流能楽を極め、青山稽古能等を主宰した。大正十一年頃まで舞台で活躍している。

△木村治一 未詳。名古屋在住の楽師。観世流。明治初期より同二十八年頃迄その名が見られる。

▽加藤半外 未詳。名古屋在住の楽師。宝生流か？

△喜多六平太 故六平太。幼名千代造。明治十四年七才にて宗家十四代となる。明治二十七年一―三月頃六平太を襲名したらしく、この当時二十四才。但し当日は都合で来演しなかったらしく、金剛流寺田左門治が三日間とも代勤しており、ゴム印で訂正している。

△片山九郎三郎 現片山博太郎師祖父。

△毛利治郎太 未詳

(ワキ方)

△西村大蔵 尾洲御抱高安流西村家第六代。庄太郎敬光。維新後上京した機会に高安流楽頭後見職に任せられる。大正六年没。

△杉山義敬 西村大蔵長男。杉山家に養子入りし、本名杉山久之輔。昭和二年没。故西村弘敬氏尊父。

△杉山義潤 西村家弟子家西村大蔵の妹婿で義敬の舅。本名杉山利兵衛。

△加藤十郎、塩川吉之丞 西村大蔵弟子(囃子方)

△藤田清次郎 藤田家分家

△藤田米次郎 九代目藤田清兵衛

△藤田清丸 藤田清次郎子息 菅原町住。

△吉田方条 本名鉄三郎。大鼓石井弥市弟子。方条の弟子に故西尾孫太郎があり、現吉田定男は方条より三代目を数える。

△立花一枝 石井弥市弟子。大鼓石井流家元預りをも勤めた。

△角田銘二 大鼓大倉流。この弟子に故永田虎之助があった。虎之助の義伯父にある。

△鬼頭八郎 観世流大鼓方。当代八郎の祖父にあたる。

△鬼頭為太郎 八郎実子。当代八郎の父。

飯田具命 八代目藤田六郎兵衛弟子。長命で古希を過ぎてからはその名を毎年令で表わし、古希六、古希七……と称した。八十過ぎは八十一、八十二……。大正元年に飯田八十六の名が見られる。

△安藤鏡太郎 飯田具命の弟子

△鈴木恒太郎 (笛方) 平岩流、のち当代藤田宗家に師事し藤田流となる

桶恒と称し桶屋を家業とする。

(小鼓はこの頃福井初太郎が舞台から遠去かっていた時期で、名古屋勢には目立った打ち手がなく、京都から来演している)

(三番叟・橋掛之舞)

二日目に初代井上菊次郎が勤めていた。様の段で橋掛りまで行って大きく舞うもので、近年上演の記録はない。

(三番叟天地和合之舞)

三日目に宗家山脇元清と伊勢門水の二人で勤めている。文字通り二人の三番叟の舞で、和泉流名寄には一子相伝の項に見えている。これも以後の上演記録はない。

(翁・大鼓・打掛り)

二日目に吉田方条が勤めている。三番叟の様出しを橋掛りから舞台へ入りながら打ち出すものだと云う。本来翁

の開演に遅れた時の機転に演じたものが型となったものであろう。石井流だけに伝わる。

(船弁慶・間・船中之語)

明治三十五年改定された山脇和泉元清の手になる和泉流狂言名寄によれば能間之部、一子相伝の項に、この船中之語の小書が見出される。古書によれば、脇に舟歌を所望された船頭が、舟歌などは舟子どもが歌うもので自分は知らないが、此様な目出度い出船にふさわしい物語があるから、これを語ろうといつて「鯉腹巻」の語りの部分を語る、というものである。これまでに明確な上演の記録はなく、脇の小書に同名のものがあるので或いは番組作成上の誤記であるかもしれない。

(靱猿・替装束)

替装束の時は大名は素襖を着ず、下袴、厚板の上に殿中羽織を着し、太刀を腰にはく。従つて太郎冠者は太刀を持たないで登場する。大名はキシヤ笠をかぶり、留めの部分で靱を捨てて入る。太郎が靱を担って入る。

尚ついでに前記和泉流名寄に一子相伝の項に記載されている曲名を列記すると左の通りである。

鳴子 眞の形 金剛 古式
釣狐 眞の形 花子 眞の形
狸腹鼓 狸腹鼓 草の形
全 眞の形、乱菊 田歌ふし
三番叟 初日 三番叟 後段和合
千歳 大流
御賀の松風流 犀の神風流
蟻風流 大黒風流
盧橋風流 著韻風流
三盤風流 鶴亀風流
餅風流 如意宝珠風流
如意宝珠風流 如意珠風流
鳳凰風流 昆沙門風流
志屋宇利屋宇地風流 仙雀風流
春神風流 福神風流

十月の予告

十月六日 九阜会
紅葉狩 近藤 幸江 高安 滋郎
能 天 鼓 金井 秀雄 佐藤 友彦
大野 弘之 西村 欽也
井上礼之助 井上松次郎
十月十日 やるまい会
萩 大名 野村 万作 野村万之丞
察 化 茂山千五郎 茂山 正義
木村 正雄
祐 善 野村又三郎 佐藤卯三郎
大矢 高義
野村 万作 野村 幸雄
十月十三日 風韻会
能 三 輪 金丸 洋子 高安 滋郎
能 蟬 丸 水野 秀子 西村 欽也
渡辺 節子
半 熊 坂 富士道周明 高安 滋郎
能 瘦 松 井上礼之助 大野 弘之
十月廿日 梅猶会
能 部 郎 岡田 朗詠
能 井 筒 梅若 修一
能 善 知 鳥 梅若 盛義
大野 弘之
能 鐘の音 井上礼之助 井上松次郎
十月廿七日 淡交会

松亀風流 住吉風流
松竹風流 布引風流
相生風流 根延風流
七夕風流 寿福風流
仙人風流 三角風流
布留風流 四季の神風流
春日風流
能間の部
安宅 貝立 舟弁慶 舟中ノ語舟歌
石橋 乱序ナシ 朝長 織法
春日龍神 町積り

狂言

十月

昭和49年10月1日発行
 発行所
 名古屋市中区橋下町7-5
 井上重兵衛方 電話(321) 1430
 名古屋狂言共同社
 印刷所
 日東印刷工業株式会社 電話(481) 7445

狂言人語

恒例の秋の「和泉会」、本年も名古屋市民芸術祭参加として十一月二十三日に別掲の如く開催されます。人間国宝野村万蔵師による「無布施経」を中心とし、「木六駄」(卯三郎)、「靱猿」(礼之助、松次郎)、「鈍太郎」(保之)と狂言の中でも屈指の名作を取り揃え、変化ある番組となりました。どうかお誘い合せの上ご来場下さい。先月号にてご紹介致しました明治十七年の博物館舞台被きの能組につきまして、多くの方々より貴重な記録、ご教示をお寄せいただいております。紙上にて御礼申し上げますと共に、追って本紙にてご紹介させていただきます。ありがとうございます。大阪在住のK氏より「大阪朝日狂言会二十周年記念公演」の様子が寄せられましたのでご紹介致します。

十月の催能

十月 六日 九阜会
 十月 六日 於 岡崎隨念寺
 紅葉狩 近藤 幸江 高安 滋郎
 天鼓 佐藤 秀雄 佐藤 友彦
 鼓 金井 久枝 西村 欽也
 大野 弘之

証 清水 井上礼之助 井上松次郎
 十月十日 やるまい会

証 萩 大名 野村 万作 野村万之丞
 察 化 茂山千五郎 野村又三郎
 祐 善 野村又三郎 大矢 高義
 蝸 牛 野村万之丞 石田 幸雄

十月十三日 風韻会
 能 三 輪 金丸 洋子 高安 滋郎
 能 丸 水野 節子 西村 欽也
 能 丸 渡辺 節子 西村 欽也

能 丸 佐藤 卯三郎 高安 滋郎
 能 丸 富士道周明 高安 滋郎
 能 丸 井上礼之助 大野 弘之

能 丸 梅猶会
 能 丸 岡田 朗詠 高安 滋郎
 能 丸 佐藤 秀雄 高安 滋郎
 能 丸 梅若 修一 西村 欽也
 能 丸 梅若 盛義 高安 滋郎

能 丸 大野 弘之 井上松次郎
 能 丸 井上礼之助 井上松次郎
 能 丸 淡交会

能 丸 井上礼之助 井上松次郎

能 丸 井上礼之助 井上松次郎

能 丸 井上礼之助 井上松次郎

能 丸 井上礼之助 井上松次郎

能 丸 井上礼之助 井上松次郎

能 丸 井上礼之助 井上松次郎

狂言解説

清水川野中の清水でお茶の水を汲んで来る様云付けられた冠者。行きたくないの鬼が出たと偽を云って逃げ戻ります。不審に思っ清水へ出掛けた主を、鬼に化けた冠者が、日頃の不満をぶつけるのですが……。

瘦松山賊の合言葉で収獲の多いを肥松、少いのを瘦松と云います。間抜けな山賊、女を威して所持品を取り上げたのですが、収獲に見入っているすきに長刀を取り上げられ、逆に女に威されて全部取り返され、自分の小刀まで取られて逃げ入ります。

鐘の音川子供成人の祝に黄金造りの太刀を造ろうと、主は太郎冠者に鎌倉で黄金の値を聞いて来る様云いつけま

す。はるく鎌倉に上った太郎は寺巡り、方々の寺の鐘の音を聞いて来てしま

ます……。

狂言万声
 野村広二
 十月一日のテレビ・歌のゴールダンス
 テーシ(NH K)で左とん平氏が今から十年前を会場の皆さんと一緒に述懐していた。新幹線がで

き(十月一日)、東京オリンピックがおこなわれた。三十九年である。その年、十月下旬には私は京都で西本願寺能(観・剛)、奈良の金春能(栄次郎古稀祝賀能、晃実・道成寺)また京都に戻って朝長・懺法(前川追善会、豊嶋弥左エ門、太鼓・前川善雄(の観能旅行を家内として、帰途京都駅で夕食をとり

ながら、オリンピック開会式をみている。往復とも今のような故障のない新幹線であった。その年は幸祥光氏の芸術院入りと島沢啓次・山本東次郎阿氏他界の明暗をみる。次に名古屋では、狂言は井上家追善の名古屋和泉会・朝日狂言会・やるまい会・中日狂言会と狂言会が近年にない多彩な年であった釣狐が二回(礼・又と千五郎八現千作V・故弥五郎翁)、唐相撲(大蔵流)も演ぜられ、万蔵・藤九郎兩氏の来名も狂言界をよろこばせた。そして茂山弥五郎家が善竹姓を名のることになったのもこの年一月からである。能は六郎・卒都婆小町、故本田秀男・祐ほか

に故猶義三番能が印象に残るテレビ能は綾鼓(龍三)熊野(大坪十喜雄)葵上(巖)融(弥左エ門)郡(得三)をみて楽しむ。能や狂言関係の本もいろいろ出た。前年の三十八年は世阿弥生誕六百年、これに続く記録内容豊富で、翌四十年は熱田能楽殿が出来て十周年に当り、来年はその二十周年を迎えることになる。そして十年たった今も狂言や能をみて楽しんでることが更に十年先きも続けられている

和泉 狂言会
 昭和四十九年十一月廿三日 午後一時始
 熱田 神宮 能楽殿
 組 井上松次郎 井上 祐一
 井上礼之助 井上 祐一
 今枝 雄靖
 佐藤 友彦
 大野 弘之
 今枝 良治

無布施経
 野村 万蔵
 野村万之介
 吉田 定男
 福井啓次郎
 藤田六郎兵衛

木六駄
 佐藤 卯三郎
 野村又三郎
 佐藤 秀雄
 井上 祐一
 井上 祐一

鈍太郎
 和泉 保之
 大野 弘之
 綾鼓(龍三)熊野(大坪十喜雄)葵上(巖)融(弥左エ門)郡(得三)をみて楽しむ。能や狂言関係の本もいろいろ出た。前年の三十八年は世阿弥生誕六百年、これに続く記録内容豊富で、翌四十年は熱田能楽殿が出来て十周年に当り、来年はその二十周年を迎えることになる。そして十年たった今も狂言や能をみて楽しんでることが更に十年先きも続けられている

名古屋和泉会
 野(大坪十喜雄)葵上(巖)融(弥左エ門)郡(得三)をみて楽しむ。能や狂言関係の本もいろいろ出た。前年の三十八年は世阿弥生誕六百年、これに続く記録内容豊富で、翌四十年は熱田能楽殿が出来て十周年に当り、来年はその二十周年を迎えることになる。そして十年たった今も狂言や能をみて楽しんでることが更に十年先きも続けられている

名古屋和泉会
 野(大坪十喜雄)葵上(巖)融(弥左エ門)郡(得三)をみて楽しむ。能や狂言関係の本もいろいろ出た。前年の三十八年は世阿弥生誕六百年、これに続く記録内容豊富で、翌四十年は熱田能楽殿が出来て十周年に当り、来年はその二十周年を迎えることになる。そして十年たった今も狂言や能をみて楽しんでることが更に十年先きも続けられている

名古屋和泉会
 野(大坪十喜雄)葵上(巖)融(弥左エ門)郡(得三)をみて楽しむ。能や狂言関係の本もいろいろ出た。前年の三十八年は世阿弥生誕六百年、これに続く記録内容豊富で、翌四十年は熱田能楽殿が出来て十周年に当り、来年はその二十周年を迎えることになる。そして十年たった今も狂言や能をみて楽しんでることが更に十年先きも続けられている

名古屋和泉会
 野(大坪十喜雄)葵上(巖)融(弥左エ門)郡(得三)をみて楽しむ。能や狂言関係の本もいろいろ出た。前年の三十八年は世阿弥生誕六百年、これに続く記録内容豊富で、翌四十年は熱田能楽殿が出来て十周年に当り、来年はその二十周年を迎えることになる。そして十年たった今も狂言や能をみて楽しんでることが更に十年先きも続けられている

名古屋和泉会
 野(大坪十喜雄)葵上(巖)融(弥左エ門)郡(得三)をみて楽しむ。能や狂言関係の本もいろいろ出た。前年の三十八年は世阿弥生誕六百年、これに続く記録内容豊富で、翌四十年は熱田能楽殿が出来て十周年に当り、来年はその二十周年を迎えることになる。そして十年たった今も狂言や能をみて楽しんでることが更に十年先きも続けられている

名古屋和泉会
 野(大坪十喜雄)葵上(巖)融(弥左エ門)郡(得三)をみて楽しむ。能や狂言関係の本もいろいろ出た。前年の三十八年は世阿弥生誕六百年、これに続く記録内容豊富で、翌四十年は熱田能楽殿が出来て十周年に当り、来年はその二十周年を迎えることになる。そして十年たった今も狂言や能をみて楽しんでることが更に十年先きも続けられている

ことを望むこと切。この道に懸命な若い人達が釣狐や花子を演じ、道成寺や卒都婆小町を勤める舞台をみたいものである。秋の演能は九月一日の大衆能から。盛会。九月は毎週あったのに、狂言小劇場(友彦・那須語)と中部金剛会をみただけで、見なかった井筒(元正)山姥(半能・内藤泰二)野宮(浦田正利)はよかったのたよりをきいた。金剛能は小督(松野恭憲)と天鼓(巖)。当日は、昔中学で国語を教えていただいた伊藤左中(さつちゆう)先生をご案内した。先生は金剛能のよさに全幅の感激を寄せられ、熱田の杜(もり)を去られた。私は先生から謡曲(能)や狂言の手ほどきをはじめて受けた。国語の時間にテキストである鉢木の冒頭や隅田川の「南無阿弥陀仏」のところを謡っていたのが昨日今日のように忘れられない。楽屋でお茶を喫し、同席の藤田六郎兵衛・鬼頭八郎両氏と呉服町時代の能楽堂のことを語り合った。狂言は釣針(又ほか)伯養(松・友・卯、佳篇)おもしろし。なお伊勢で二十二日大蔵流狂言会(弥太郎・伊勢竹風会)が奉納された催しは上司海雲和上墨蹟展(丸栄)で「吾心似秋月」に感銘。

放送は文化展望・梵鐘(上司海雲・小泉文夫、鐘の音・万蔵)日本史探訪・足利義満(山崎正和、井筒・静夫)院展(鞍馬の牛若丸・観彦)教養特集・能と舞における女人像・変身的美(

梅原猛・松田修)をみ、松風(鞍馬道雄)名人のおもいで・観世左近(いづれもNHK)をきく。本は狂言(吉越立雄・羽田利八ひさしV、保育社カラブックス三〇二、二八〇円、狂言の現況欄に狂言共同社紹介、能は既出)ほか

大阪の朝日狂言会

二十周年記念公演

大阪三越劇場で昭和三十年以来続けて来た朝日狂言会が二十周年を記念して第四十回を十一月二十六日(火)午後三時から開き「二人袴」玄三郎ら「千鳥」千作・千之丞「惣八」忠一郎・幸四郎「髭櫓」千五郎・忠三郎ら関西の大蔵流の名家が勢ぞろいする。戦後、大阪朝日会館で開かれていた芸術祭五流能に随伴して二回東西合同狂言鑑賞会が催され、和泉流の野村・三宅両家も参加、来日した梅蘭芳ら京劇一行も参観した。これが戦後の狂言ブームの一因を作ったものだが、関西が主流となっていた大蔵流では千五郎家・忠三郎家・弥五郎家の茂山三家が人材をそろえているのに、三家の人々が顔を合わせる事がほとんどなかったのを、当時まだ若手だった同人諸師が入れ交じり、弥五郎・先代忠三郎・現千作の三名人の補導で競演したのが効を奏し、名古屋・京都・東京でもこの種の狂言会が行われるようになった

その先駆となったこの会が二十年も続いたのである。毎回、昼間は学生狂言教室として北岸佑吉氏の解説つきで狂言二番つづを中学・高校・大学生向けに見せ、夜を一般公演にあてているが、今回だけは狂言教室を休み、午後三時から一般向けに公演を開く。ちようど大阪府市合同の文化祭の期間なので、以前のように、またこの会から受賞者があるだろうと期待されている。

十一月の予告

| | | | |
|---------|-----------|-------|-------|
| 十一月 四日 | 正風会 | 竹内 澄子 | 西村 敏也 |
| 半能 藤 | 能土 蜘蛛 | 衣斐 正宜 | 高安 滋郎 |
| 能 飛 | 越 野村又三郎 | 井上松次郎 | |
| 十一月 九日 | 一編会 | | |
| 能 熊 | 坂 近藤 重次 | 高安 滋郎 | |
| 間 | 野村又三郎 | | |
| 十一月 十日 | 観世会 | | |
| 能 葛 | 城 片山博太郎 | 西村 敏也 | |
| 間 | 佐藤 友彦 | | |
| 能 景 | 清 観世鉄之丞 | 高安 滋郎 | |
| 能 醉 | 蓋 佐藤 秀雄 | 井上礼之助 | |
| 十一月 廿三日 | 和泉会 | | |
| 十一月 卅日 | 久田観正会 | | |
| 能 安 | 宅 上田 照也 | 高安 滋郎 | |
| 間 | 野村又三郎 | 佐藤 秀雄 | |
| 能 羽 | 衣 大槻 秀夫 | 西村 敏也 | |
| 半 石 | 橋 久田 秀雄 | 高安 勝久 | |
| 狂 福 | 之 神 井上松次郎 | 佐藤 友彦 | |
| | | 大野 弘之 | |

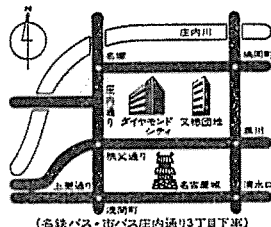
ゆたかなくらし 楽しいショッピング

木曜定休

500台収容
駐車場完備



新しい生活がある街
AEON CITY
名古屋市西区普吾町6-56 TEL 523-2444



狂言

狂言人語

秋もいよ／＼深まってまいります。気象庁の長期予報では、当年は寒波の襲来も例年よりかなり早いとのこと、その上寒さも厳しそうです。秋の名残りも今しばしです。お身体にも随分お氣をつけ下さい。

もう一つ、この冬の厳しさは昨秋以来のインフレです。観能の入場料も結構高くなりました。それでもインフレになると能狂言を観る人が増えるかもしれません。インフレでタクシー料金が上がると、電車、バスでの通勤者が増え、車内で週刊紙を読む人が増えます。週刊紙が家まで持ち帰られると、主婦達の井戸端会議の話題が豊富になります。井戸端会議の話題の発展はこの娘が……云々が取り沙汰されるようになり、売れ残りそうな娘さんがあせります。当然結婚式が増えて、祝いの宴で「高砂や」を謡う人が増えて来ます。そこで……。「風が吹けば桶屋がもうかる」式には行かないものでしょうか。

さて今月は恒例の名古屋市民芸術祭参加「和泉会」が開催されます。呼び物は人間国宝野村万蔵氏の「無布施

経」ですが、もう一つの話は当地久し振りに上演の「靱猿」です。俗に狂言師は「猿に始って狐に終る」と申しますが、今回この子猿で初舞台を踏むのが今枝靖雄君です。当地共同社総出演でお贈りします。可憐な子猿の演技に御期待下さい。

十一月の催能

| | | |
|-------------------|-------|-------------------|
| 十一月 四日 | 正風会 | 半能藤 竹内 澄子 西村 欽也 |
| 十一月 九日 | 一謡会 | 野村又三郎 井上松次郎 |
| 十一月 十日 | 観世会 | 能 葛 城 片山博太郎 西村 欽也 |
| 十一月 十日 | 佐藤 友彦 | 能 景 清 観世鉄之丞 高安 滋郎 |
| 十一月 廿三日 | 和泉会 | 狂 醉 蓋 佐藤 秀雄 井上礼之助 |
| 十一月 卅日 | 久田観正会 | 能 安 宅 上田 照也 高安 滋郎 |
| 能 羽 衣 大槻 秀夫 西村 欽也 | | 野村又三郎 佐藤 秀雄 |

昭和49年11月1日発行
 発行所
 名古屋市中区橋下町7-5
 井上重兵衛方 電(321) 1430
 名古屋狂言共同社
 印刷所
 日東印刷工業株式会社 電(481) 7445

狂言解説

飛越 越お茶の宗匠に壇那から頼まれた新発意。壇那と連れ立って迎う途中小川に出ました。壇那は苦もなく飛越えませんが。新発意はどうしても越えられません。そこで二人で手をとって連れ飛びにしようとなりますが……。

醉 蓋 行商の途中で出くわした酔売とはじかみ売(しょうが売)。互に商売司を争って口論となりますが勝負がつかみません。そこで互に商売物によそえての秀句争いとなります……。

福の神川 毎年大晦日に大社に参詣する二人連れ。今年も連れ立って参拝する所に福之神が登場します。ちゃっかりお神酒を請求したりしますが、二人に楽しくなるようありがたい教示を残し再び神殿に帰って行きます。

狂言万声

野村 広二

十月の狂言はやるまい会(十六回)の狂言四番に梅若猶義三回忌追善能の鐘の音(礼・松)をみる。盛会の追善会の盛義氏は善知鳥(替翔入・外之浜風)をたむける。井筒(物著、梅若修一)どともに佳。やるまい会は和泉三番・大蔵一番。舞台の笑いの明暗を楽しむ。なお十月の東西は万蔵喜寿祝賀

会。和泉会別会・十五世と十九世弥右衛門追善大蔵会に茂山狂言会が好を競う。九月の「狂言」の名古屋博物館能舞台開の資料をご覧になって、いろいろの好意ある感想・反響が共同社に寄せられたとき。まことにうれしい。私も清田弘氏(東京)から先き頃の「三番叟の位」に続き、二日目の翁・三番叟・大鼓打掛りの小書演出、また渡会恵介氏(京都)からは能組のつた能仁新報について卓見をいただいた。お礼を述べたい。さて、あの記録は別に「お能の番組」(明治・大正・昭和、田鍋惣太郎)、「小鼓芸話」(寸見、同氏)と「名古屋市史・風俗篇」(大四・八月、雅楽・平曲に続き江戸時代からその当時までの能・狂言叙述、悉しくは別記)にもみられる。「狂言」の名古屋博物館は「番組」と「市史」では愛知(県)となる。内容は演能日と故六平太氏の来名ほか大体同じで、「市史」によると、十・十二・十四の三日間おこなわれ、六平太氏は三日目(十四日)の舟弁慶だけを勤める。「番組」では六平太氏が四番を演じている。因みに市史には十一・十三の両日は雨で延期の注がつく。見所は本願寺能のようか、または屋外のように思われる。ちょっと同異を。次は八月の能楽タイムズに「小見狐疑」を寄せたとき、水道橋の舞台の思い出のひとつコマで大鼓方故高安道喜氏のごとにふれたが、本家筋に当るワキ方高安

滋郎氏から道喜氏が昭和二十年放、芝公園内花岳院にお墓のあることなどを承った。そのとき前名鬼三(敬称略)を「きぞう」と話しあう。その後夏のオジオ放送(思い出の名人集、観世左近、NHK)に道喜氏が大鼓を打つパヤシ・羽衣が出てなつかしかったが「おにぞう」と紹介していた。おやと思った。私は故田鍋惣太郎氏から「きぞう」と教わり、高安滋郎氏もそう。NHKに問いあわせたところ、観世家になつねて「おにぞう」の由返事があつたとのこと。時経てこの頃、明治・大正・昭和の舞台を生きてこられた野村万蔵氏におたづねした。同氏父上(万斎)は「おにぞう」、念のためきいてくださった安福春雄氏(大鼓方高安流家元預り)は「きぞう」といわれた旨丁寧な返事をいただく。故野々村成三氏の能楽史話の系図の項には振假名がない。古事を知るは、むつかしい。催しは舞楽・採桑老(さいそうろう、羽塚堅子、舞楽と管絃の会)、日本伝統工芸展(オリエンタル中村)で人形・班女(京都林駒夫)、近代日本美術・巨匠一〇〇人展(朝日、愛知県美術館)で王昭君(安田鞆彦)能の女(中川紀元、筆者注羽衣か)をみる。全館を廻って能・狂言と相通ずる日本の美の佳さに心打たれた。放送は葛城(金剛殿)鳥帽子折(観世元昭・清頭・和泉保之ほか)をみ、峯入り行者(飯沢匡作、千五郎・忠三郎・木村正雄、

F.M. 芸術祭参加ドラマ、いろいろもNHK)をきく。本は「夏に技藝に声」(野村万蔵、新潮社)初代井上菊次郎掲載、題名の文章は二七九—一八一頁)どの頁を開いても万蔵氏の面目躍如。父の稽古(野村万作、波十月、同社)謡曲の詩と神曲の詩(平川祐弘、季刊芸術、七四年秋季号、季刊芸術出版KK、佳篇)ほか。

十二月、一月の予告

十二月 一日 義捐金募集能

能 富士太鼓 殿島 修二 西村 欽也

能 吉野静 鬼頭 嘉男 高安 滋郎

能 葵 上 野村又三郎 佐藤友彦

能 葵 上 佐藤 太俊 高安 勝久

能 葵 上 佐藤 卯三郎

能 墨 塗 井上礼之助 大野 弘之

能 墨 塗 井上礼之助 井上松次郎

能 十二月 八日 宝生会

能 松 虫 内藤 泰二 西村 欽也

能 藤 戸 大坪十喜雄 高安 滋郎

能 藤 戸 井上礼之助

能 伯母ケ酒 井上松次郎 佐藤 秀雄

能 十二月十五日 文月会

能 鶴 亀 吉田 俊彦 高安 滋郎

能 大原御幸 富岡 五郎 水原 一颯

能 安 宅 風岡 勇二 高安 滋郎

能 阿 漕 井上松次郎 佐藤秀雄

能 阿 漕 小沢 喜一 高安 勝久

能 阿 漕 大野 弘之

狂 二九十八 左藤卯三郎 佐藤 秀雄

五十年一月ノ予告

一月 七日 学生能と狂言の会

能 田 村 若尾 正士 西村 欽也

能 田 村 亀井 熱 西村 欽也

能 胡 蝶 角田 陽子 半田 龍男

能 胡 蝶 滝 昌子 半田 龍男

能 国 栖 渡辺 隆男 竹川 克巳

能 国 栖 加藤 龍二 竹川 克巳

能 紅 葉 狩 石井 要子 高安 滋郎

能 紅 葉 狩 井辺 洋子 高安 滋郎

能 紅 葉 狩 松井直子 五味美恵子

能 齊 葉 煉 内海 勇夫

能 齊 葉 煉 山口 隆夫

能 舟 ふな 河田 公明 大岩 英二

能 一月十五日 清韻会

能 班 女 小島 爽 西村 欽也

能 班 女 佐藤秀雄 井上礼之助

能 藤 戸 長谷川ミノル 高安滋郎

能 藤 戸 佐藤卯三郎

能 餅 酒 佐藤 友彦 井上松次郎

能 餅 酒 大野 弘之 井上松次郎

能 一月十九日 呉竹会

能 一月廿三日 大商會 於 名演小劇場

能 文 相 換 井上松次郎 大野 弘之

能 文 相 換 佐藤 友彦

能 醉 臺 佐藤卯三郎 井上礼之助

能 醉 臺 佐藤 秀雄 鷺見 政行

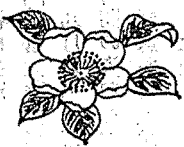
能 鷄 簪 佐藤 秀雄 佐藤 友彦

能 一月廿六日 弱法師 和島富太郎 西村 欽也

能 弱法師 佐藤 友彦

能 杜 若 泉 嘉夫 高安 滋郎

能 伯母ケ酒 野村又三郎 井上礼之助



何と云っても
ます はん

お茶は升半



◆大名古屋ビル地下街店◆栄(さかえ)地下街店◆サカエチカ店◆松坂屋<名店街>売店